

ヤマシロオニグモの生態

池田千洋*

Habits of *Neoscona scylla*

Chihiro IKEDA

普通種だが、あまりよく知られていないヤマシロオニグモの生態を観察したところ、少し新しい事実が分かつたので報告したい。

観察の目的

次のような点に注意しながら、夜間観察を中心に調査を行なった。

(1)どのような環境に多いか、(2)雌雄の成熟時期はいつか、(3)雄の求愛行動はどのように行われるか、(4)雄どうしの争いがあるか、(5)網を張る時間はいつか、(6)雄や雌に模様のちがいがあるか

結果

(1)生息場所

1993年5月29日20時から、神奈川県足柄上郡大井町内の寺社を周り、ヤマシロオニグモを探した。結果は以下のようにあまり多くなかった。

最明寺……0頭 天神社……3頭 了義寺……1頭

同時期に中郡大磯町の高麗神社には7頭がいた。翌日5月30日には大井町の隣りの松田町、延命寺の奥の沢沿いを探した。スギの若木の間に4頭のヤマシロオニグモが網を張っていた。数は多くないが、自宅から近いのでここを観察場所に選んだ。大井町内の寺社と比べると、ここは山のふもとに当り、周囲に人家が無かつた。

(2)成熟時期

1993年6月17日と同年7月3日の観察で、雌よりも雄が早く成熟すること、雄の成熟時期は6月下旬であることが分かつた（図1）。雄は成体になると網を張らなくなる。雌は夜しか網を張らないので、雄は雌の網に同居することはない。6月下旬は中学校では1学期の期末テストの時期であるため、これ以上の観察はできなかつた。

*〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099（大井町立湘光中学校2年）

(3) 雄の求愛行動

1993年7月3日および7月8日の夜22時頃に雄の求愛行動が観察できた（図2）。

雄はスギの枝先を歩き回つて雌を探していた。雄は雌の網のこしきにつながる1本の糸を張る場合（1993年）と雌の網のたて糸を利用する場合（1994年）があつた。雄は糸を主に第Ⅰ脚、第Ⅱ脚ではじき、雌に求愛の信号を送つた。雄はしだいに雌に近づいた。雌は初め、円網の中心で頭を下に向いているが、雄の信号に反応して上を向いた。雌は雄のはじいた糸をはじき返し、雄に向かつて突進した。雄は雌が近づいてくると、向きを変えて逃げた。

雌が網の中心、こしきに戻ると、雄は再び糸の上に戻つた。しばらくすると、雄は糸をはじき始めた。雌の反応も同じようにくり返され、約1時間の間に何回も雄が近づいては逃げる行動が起つた。雌の大きな動きで網は半分以上壊れてしまった。両日とも交尾行動までは観察できなかつた。

雌は雄を拒否しているようにも見えたので、この雌は既に雄と交尾した後だつたのかもしれない。雌が成体になつた直後に観察する必要があると思った。

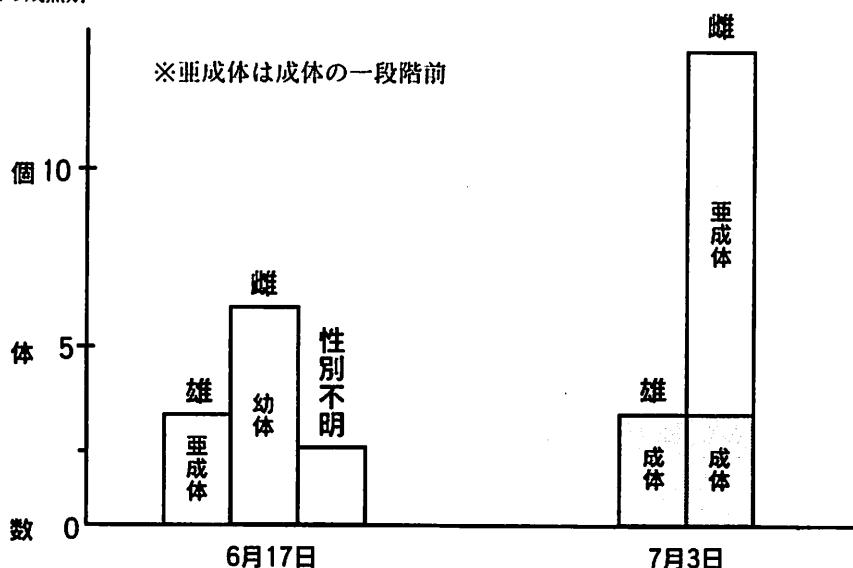
(4) 雄どうしの争い

1994年7月8日21時30分、雌の網の縦糸の近くに、スギの枝上を歩いていた雄を入れて、求愛行動を観察していた。

20分ほどして、突然雌が雄とは別の方向を向いた。雌の向いた縦糸の先を見ると、別の雄が来ていた。先に入れた雄をA、後から来た雄をBとする。

すぐにAもBに気がついた。Aは雌にかまわず、Bの方に突進していった。雌の網の上部、スギ

図1. 雌雄の成熟期



の枝先でBとAは向き合い、第I脚で糸を引き合ってお互いを威嚇した。さらにAがBに近づき、AとBはとつ組み合いになった。AとBが離れると、Aはその場に残ったが、Bは奥に逃げたので、Aが勝ったと思われた。

Aは再度雌に近づいた。Aを追いかけるように、雌が網を壊しながらAに向かつてかけ上がっていった。雌が壊れた網の中央に戻ってきた時、さつき逃げたBがまた近づいて来て、Aともう一度争いになった。再びBが負けた。

その後、雌はスギの枝の近くに移動し、Aと隣り合って糸に下がっていたが、特別な行動は見られなかつた。

ヤマシロオニグモでは雄の間に雌をめぐつて争いが起こることが分かつた。

(5)造網時刻

1994年7月9日18時5分、同日22時30分、7月10日8時、7月13日13時10分、同日21時に網があるかどうかを調べた。18時5分には網を張っていたのは4頭で、22時30分になると雌成体8頭が網を張っていた。このうち7頭は朝8時にはまだ網をたたんでいなかつた。昼の13時にはすべての雌が網を張つていなかつたが、同日21時にはすべての雌8頭が網を張つていた(図3)。

これらの結果からヤマシロオニグモ雌成体は夕方から網を張り始め、夜中に餌捕獲などの活動をして、朝8時以降に網をたたみ始め、日中は網を張つていないことが分かつた。

図2. オスの求愛行動

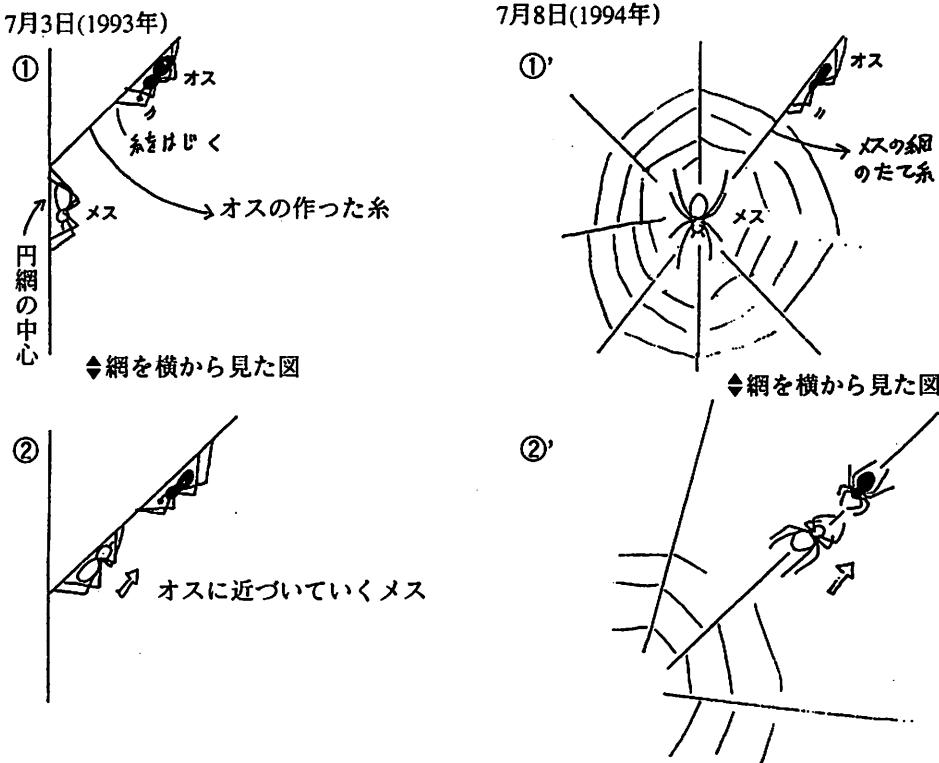
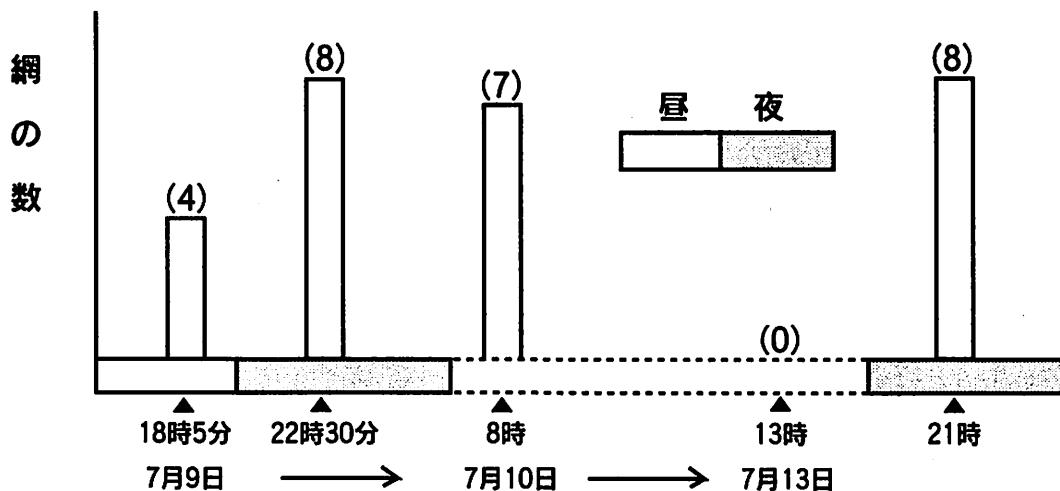


図3. 時刻による網の数



(6) 雄や雌の模様の違い

1994年7月10日、網を張っていた雌8頭は腹部の色と模様から4つの型に分けられた（図4）。

普通型……5頭 普通黒型……1頭 後黒型……1頭 背白型……1頭

この場所ではこれ以外の型は見られなかった。また、雄はのべ7頭を観察したが、すべて普通型だった。

要約と反省

1993年、1994年の2年ごしの観察によって、ヤマシロオニグモの生態について神奈川県足柄上郡松田町では次のようなことが分かった。

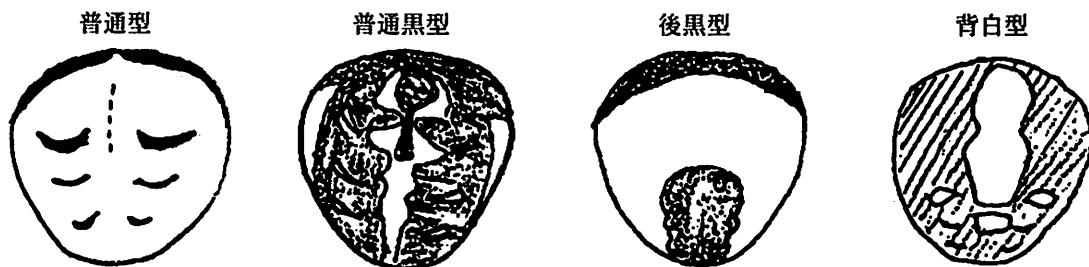
- (1)人家の少ない山に多かつた。
- (2)雄は6月下旬に成体になり、雌はおそらく7月初めから成体になり始める。7月8日にはすべての雌が成体になっていた。
- (3)雄は雌の網の外から糸をはじいて求愛信号を送った。
- (4)1頭の雌に2頭の雄が求愛に来て、雄どうしの争いが観察された。
- (5)網を張り始める時刻は、7月上旬の雌成体では夕方6時頃からだった。網をたたみ始める時間ははつきりしないが、朝8時以降と思われた。日中は網が無かつた。雄は成体になると網を張らなくなつた。
- (6)雌の腹部の模様は4つの型に分けられたが、雄は1つの型だけだった。ただし、千国（1989）では雄の腹部にも3型があるのが分かる。

まだはつきりしていないことが多いたくさんある。例えば、雌が成体になった直後の行動、雌と雄の

比率、交尾行動、網をたたむ時刻、幼体や亜成体の時期の行動などである。

これらも今後調べていければよいと思う。

図4. メス成体の4型



参考文献

千國安之輔 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 倍成社.

飼育下におけるヤリグモの発育

加 藤 むつみ*

Development of *Argyrodes saganus* under Rearing

Mutumi KATO

ヤリグモにおいて、室温飼育と冬期加温飼育により、年4世代を見ることができたので、その発育に関して報告する。

方 法

1993年7月、神奈川県厚木市飯山観音において採集したヤリグモ雌は室内飼育で産卵した。その卵のうから出のうした幼体（子に当たる）を、共食いと脱皮殻の混在を防ぐため個体別に縦3cm、横4cm、高さ10cmのタッパ型容器に分けて飼育した。脱皮のたびに脱皮殻を回収し、成体はできるだけ余命を全うさせた後に標本にした。

同年10月に再び飯山観音で採集した亜成体雌を飼育して成体にした雌と、育てあげた雄1個体を交尾させた。得られた孫、及び孫どうしの交尾により生じたひ孫を、引き続き同じ容器内で飼育を行った。産卵された卵のうから出のうした個体はほとんど野外に放し、飼育個体の数を限つた。数を限つたのは確実に飼育するためである。

1993年11月下旬から1994年5月上旬にかけてはタッパ型容器を簡易加温箱内に置き、保管した。簡易加温箱の内部は17°C～23°Cに保溫されるが、室温の影響も受ける（加藤 1994）。

飼育を行つた部屋は北向きで、光環境は悪く、比較的天気の良い日でも30～50lux、雨天時には10lux以下になることもある。餌を与えるために容器ごと明るい外（1万luxを超える）に出したこともあつた。しかもカブトガニとの同時飼育のため、ほぼ1日おきに20時から22時の間の1時間、人工照明下にあつた。光条件については以上のようにコントロールはしなかつたし、配慮もしていない。気温測定はこの間に行つた。

ヤリグモはクモを専食するクモである。飼育はオオヒメグモ・クサグモ・ヒメグモ・シモングモの幼体など、飼育個体より小さめの弱そうなクモを与えた。また、餌は手に入る限り欠けることなく与え（食べ残した餌が飼育容器内に在る時は与えない）、飽食条件を目指した。

得られた脱皮殻は乾燥保存した。成体及び途中で死亡した幼体は70%エタノールで液浸したが、一部は10%ホルマリンを用いた。各部のサイズは50倍の透過型光学顕微鏡の接眼ミクロメーターを用

いて測定した。

結果と考察

飼育したヤリグモの系譜を図1に示した。また図2は月別の温度変化と飼育個体ごとの飼育経過を示したものである。最初の雌の産卵は8月4日（この卵のうからの出のう数は33），その子の雄と交尾した雌の産卵は11月20日（ふ化せず），12月14日（出のう数56），1月30日（出のう数29），3月26日（出のう数16），4月25日（出のう数12）の5回。2個目の卵のうから育った雌雄同士の交尾での産卵は4月5日（出のう数39）だった。[15]の雌は5個の卵のうを作り，そのうち4個がふ化したが，5番目の卵のうから出のうした子グモが発育した時期（4月25日産卵～6月28日成熟）は彼女の孫[310][311]の発育時期（4月24日産卵～6月18日あるいは7月3日成熟）とほぼ同時だった。16個体中，1個体[13]は成体にならずに死亡してしまった。残る15個体中，出のう後3回の脱皮で成体になったものは7例（♂5，♀2），4回の脱皮で成体になったものは8例（♂4，♀4）だった。卵のう内には1種類の脱皮殻しかなかったことから，出のうは2令で行われ，前者は5令，後者は6令で成体になったと言えよう。

1) 発育期間および令期間

8月4日に産卵された世代を8月生れ，12月14日産卵の世代を12月生れ，1月30日産卵の世代を1月生れ，3月26日産卵の世代を3月生れ，4月25日および4月5日産卵の世代を4月生れとした。各世代の卵のう作成日から成体になるまでの日数（発育期間）を比較した（表1）。値はほぼ平均日数 + 標準偏差で示した。

表1. 世代別の発育期間（産卵から成熟までの日数）

世代 日数	8月生れ 48.3 ± 4.03 (N=3)	2月生れ 94.8 ± 10.38 (N=6)	1月生れ 82 (N=1)	3月生れ 62.5 ± 0.5 (N=2)	4月生れ 76.0 ± 9.90 (N=3)

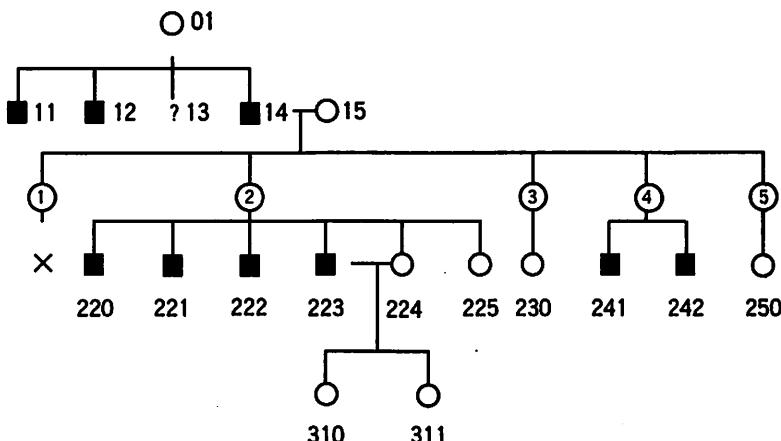


図1. ヤリグモの家系図

番号…固体名、丸数字は同一固体が作成した卵のうの作成順

○は雌、■は雄、？は成体まで育たず不明を示す。但し13は、ほぼ雌と推定。

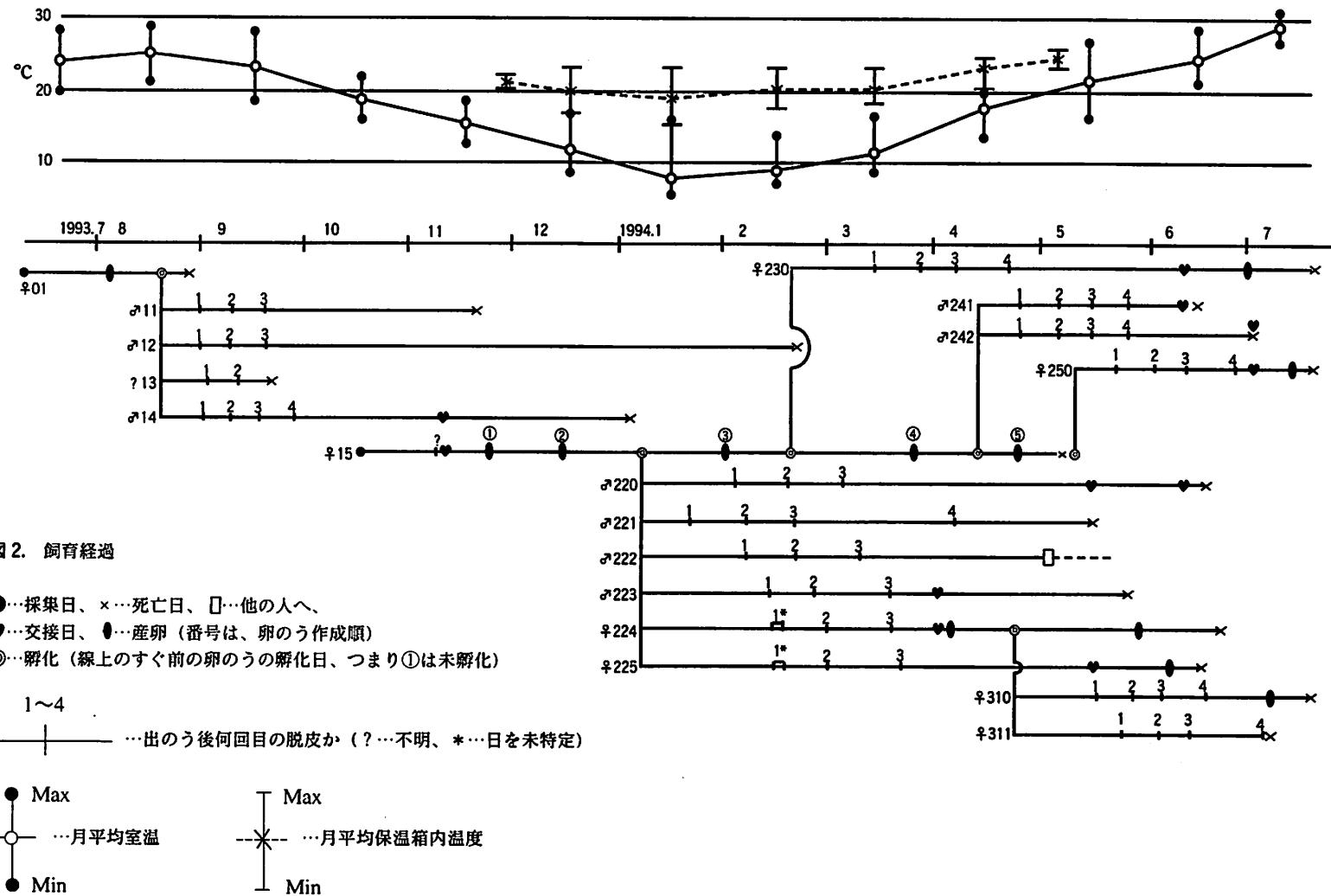


図2. 飼育経過

- …採集日、×…死亡日、□…他の人へ、
- ♥…交配日、●…産卵（番号は、卵のう作成順）
- ◎…孵化（線上のすぐ前の卵のうの孵化日、つまり①は未孵化）

1~4

…出のう後何回目の脱皮か (?…不明、*…日を未特定)

● Max

○ Min

Max

…月平均室温

Min

Max

…月平均保温箱内温度

Min

8月生れでは発育にたつた48.3日しかかかっていない。この世代は5令で成体になった♂が2頭、6令で成体になった♂が1頭であった。3個体の5令になるまでの期間を平均するとわずか44.7日しかなかつた。12月や1月の冬世代ではその倍くらいかかっている。バラつきも大きい。このように冬期の発育が遅れるのは餌不足（冬期で餌が手に入りにくい）と温度の影響だろう。

各世代ごとの産卵から出のうまでの日数を表2に示した。

表2. 産卵から出のうまでの日数

世代	8月生れ	12月生れ	1月生れ	3月生れ	4月生れ
日数	15	23	21	19	18

8月生れは出のうまでが圧倒的に短い。冬期の簡易加温箱内では（12月生れ～4月生れ）、次第に春になるにつれ出のうまでの期間が短縮している。

次に出のう後の発育を世代ごと、令ごとに整理してみたところ、面白い結果が現れてきた（表3）。

表3. 8月生れ♂の令期間

令	2	3	4	5	計
日数	11.5 ± 0.5 (N=4)	9.0 ± 0.71 (N=4)	9.33 ± 1.25 (N=3)	11.0 (N=1)	29.83 (5令成体) 40.83 (6令成体)

前述したように8月生れでは6令で成体になった♂が1例、他の2例は5令で成体♂になった。個体ごとのバラつきは非常に少なく、ほんどの個体も同じような日数で発育している。2令の期間が少し長くかかっている。この傾向はどの世代でも見られた。

12月生れでは6令で成体になった♂が1例、他の5例は5令で成体になった（♂3、♀2）。2令期間が長く、しかもバラつきが大きい。3令や4令の期間は8月生れに比べるとずっと長いが、バラつきは小さかつた。6令で成体になった♂は5令の期間が46日間と異様に長かつた。この♂を除くと、5令成体♂は産卵から成熟までが平均87.3日間、5令成体♀は平均96.5日間で、9日間ほど♂の成熟が早かつた（表4）。

表4. 12月生れの令期間

令	2	3	4	5	計
日数	30.5 ± 8.64 (N=6)	14.8 ± 1.34 (N=6)	18.7 ± 3.14 (N=6)	46.0 (N=1)	64 (5令成体) 110 (6令成体)

1月生れは6令で♀になつたにもかかわらず、12月生れに比べて発育は早かつた。4令と5令の期間が短かつたためである。出のう以後の脱皮日を見ると3月15日、3月29日、4月8日、4月23日と初春にかかっている（表5）。

表5. 1月生れ♀の令期間(N=1)

令	2	3	4	5	計
日数	23	14	10	13	60

さらに注目したいのはこの1月生れと次の3月生れ、4月生れのいずれも6令で成体になっている点である（♂2、♀3）（表6・表7）。これだけのデータで断言するのは冒険であるが、発育に何らかの季節的要因が関わっている可能性がある。さてその要因だが、飼育方法からすると日長との関わりを見つけるのは難しそうだ。温度も簡易飼育箱を使っており、図2を見る限りでは、はつきりしたことは言えない。ただ4月位から（この図は月平均気温なので実際はもう少し前から）飼育箱内と室温との差が少なくなっている。つまり給餌活動の時に室温にさらされて生じる温度落差が減っているはずで、これが関係しているかもしれない。

表6. 3月生れ♂の令期間(N=2)

令	2	3	4	5	計
日数	12.0	12.0	10.0	10.5	44.5

表7. 4月生れ♀の令期間(N=3)

令	2	3	4	5	計
日数	22.3 ± 7.85	10.7 ± 0.47	9.0 ± 0	16.0 ± 2.94	58

さらに、飼育環境下のヤリグモが季節を知る可能性として、野外から採集している餌のクモを通しての情報が考えられる。昆虫やクモを捕食するクモにとっては、餌の量や質（体液の成分など）により季節を知った方が、餌より代謝が先走ったりする危険が防げ、合理的と思える。

4月生れでは2令期間の長さとバラつきが目だった。それに比べて3令や4令の期間は8月生れ同様の日数であった。飼育した個体が3月生れは♂だけ、4月生れは♀だけに育ってしまったため、雌雄の発育差を同時期で比較できなくなってしまったが、3月生れの♂の方が13.5日間ほど発育期間が短かった（表1参照）。

2) 発育とサイズ

発育や成長の記録として脱皮殻はかなり色々な情報をもたらしてくれる（前川・池田 1994）。得られた脱皮殻についてはa（背甲幅）、b（頭長）、c（背甲長）、d（第Ⅰ歩脚附節長）を測定した（図3）が、2令期の脱皮殻の頭胸部は変形が著しく、データが十分取れなかつた。しかし、部位によつては測定可能なところがある。最も安定していて測定しやすい部位はd（第Ⅰ歩脚附節長）であつた。

そこで成体（脱皮殻ではなく、標本）についてもdを測定した。これらのデータから、サイズと発育について述べたい。成体について、雌雄のサイズ差や5令成体と6令成体の差を調べた（表8）。

表8. 5令成体と6令成体のサイズ（第Ⅰ歩脚附節長）の違い（雌雄別）

	5令成体	6令成体 (mm)
♂	1.26 ± 0.030 (N=4)	1.37 ± 0.041 (N=4)
♀	1.22 ± 0.025 (N=2)	1.44 ± 0.030 (N=4)

5令成体は6令成体よりも小さかつた。また5令成体では♀と♂はほぼ同じ大きさだった、6令成体ではやや♀の方が大きかつた。前述したように5令成体は8月生れと12月生れに多く、それに比べて1月生れ、3月生れ、4月生れは6令成体が多い。

脱皮殻と成体標本をもとに、令に伴うdのサイズの変異を図4に示した。グラフCからは、5令成体と比較した場合に、6令成体では4令頃に発育遅滞が現れるため、5令で成体にならずにもう1度脱皮するようと思われる。

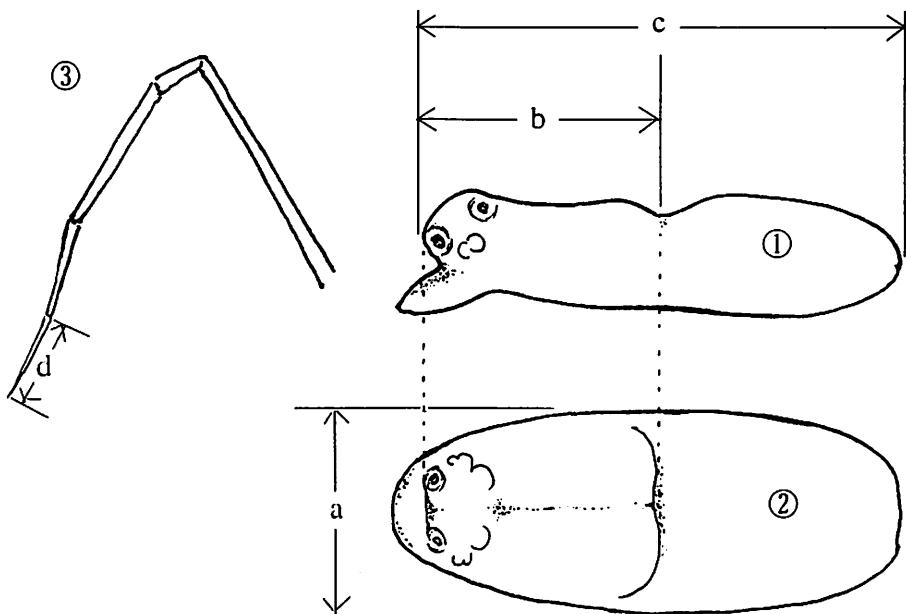
同じ生まれ月の個体は、ほぼ同じ飼育方法をとっているにも関わらず生じる発育期間やサイズのバラつきは、個々の個体に生じている問題を示している可能性がある。もしこのようなデータの検討から、個々の代謝上の問題を明らかにできるならば、少數のクモの調査でより広いクモの知見が得られるようになると思う。

3) 性徴

ヤリグモの雄は性徴として触肢以外に、額に独特のつの（突起）を持つ。亜成体の触肢にも雄の兆しがあるのなら、額にもあるはずと考えて脱皮殻を検鏡してみると、毛のはえたコブがあつた。写真1は亜成体雄、写真2は亜成体雌の脱皮殻である。触肢に差の出ないそれ以前はと見てみると、この倍率では雌雄の差を見つけられなかつた（写真3）。ただし6令成体の場合は触肢に差のない4令段階で脱皮殻の顔前面に写真4のような毛が観察された。

つまり、ヤリグモは出のう後の飼育で、2回脱皮させることができれば雌雄の判定ができる、比較的短期間で性比の情報を得ることも可能であると思われた。

図3. 測定部位 ①…背甲横面図 ②…背甲上面図 ③…第一歩脚



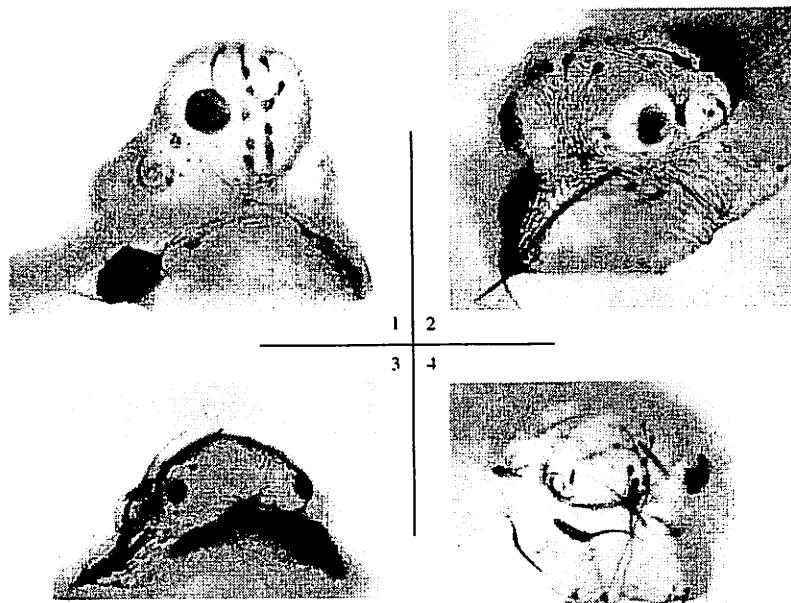
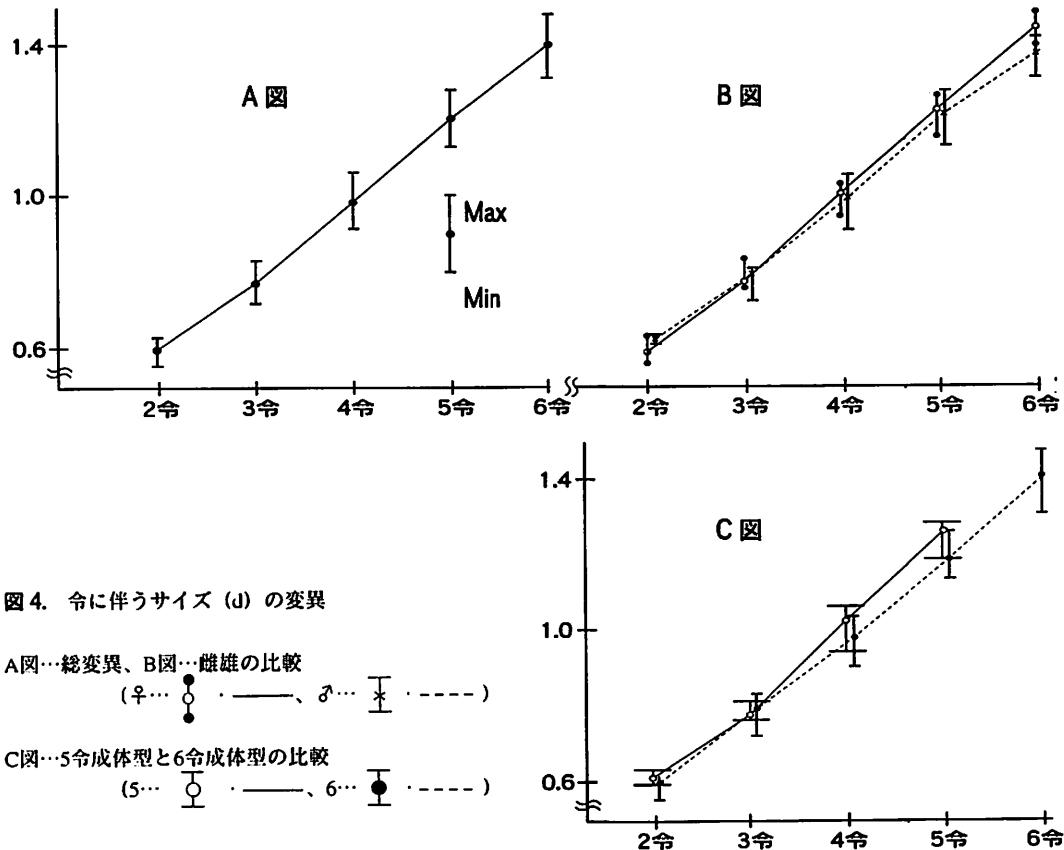


写真 ヤリグモの脱皮殻（顔の部分）

1…♂幼虫、2…♀幼虫、3…一般幼虫以前、4…6令成体型♂の頭部

謝 辞

草稿に際して統計処理は池田博明さんにお願いし、その位置づけに関しても多くの助言をいただいた。飼育に関しては、佐藤幸子さんの助言をいただき、さらに、増え過ぎて私の手に余る個体の飼育は工藤泰恵さんに引受けさせていただいた。御援助下さった皆様方、そして精一杯頑張って生きてくれたヤリグモ達に、心から感謝します。

参考文献

- 加藤むつみ.1994.簡易加温箱とキジロオヒキグモの飼育.*Kishidaia*,(67).投稿中.
前川隆敏・池田博明.1994.飼育条件下でのネコハエトリ幼体の成長と発育.*Kishidaia*,(66):27-33.
吉倉 真.1987.クモの生物学.学会出版センター. p9,p18.

【補記】ヤリグモにおける第I脚ふ節と他の部位との相関

通常、クモの発育や成長の記録に当たっては背中幅(a)、または背甲長(c)が使用されることが多い。ヤリグモにおいて、第I脚ふ節とこれらの部位との相関がどうなっているかを示した。

最初に成体における各部の測定値を表8に示した。

次に、表9の成体の各部の平均値を用いて、dとの比率を求めてみた(表10)。

dの測定値に上記の比率をかけば他の値を求めることになる。しかし、その場合、dと各部との相関が高いか低いかが問題になる。そこで、dと各部の相関係数rを算出してみた(表11)。その結果、dと最も高い相関を示したのは雌雄ともb(頭長)であった。次いで相関が高いのはa(背甲幅)であった。c(背甲長)はやや相関が低かった。ここで生じた相関の高低はヤリグモの体形の問題というより、いろいろな事情で生じる測定誤差の大小による可能性があることも付け加える。

表9.成体の各部の測定値(mm) *dのみN=9

	a	b	c	d
♂	0.75 ± 0.040	0.71 ± 0.051	1.28 ± 0.089	1.32 ± 0.064 (N=9*)
♀	0.85 ± 0.074	0.75 ± 0.025	1.40 ± 0.084	1.36 ± 0.098 (N=8)

表10.dと各部の比率

	a/d	b/d	c/d
♂	0.568	0.538	0.970
♀	0.625	0.551	1.029

表11.測定部位どうしの相関係数

r	♂	a-d	b-d	c-d	
	♂	0.77	0.83	0.68	(N=8)
	♀	0.73	0.80	0.60	(N=8)

飼育条件下でのアサヒエビグモ幼体の発育経過

宮 下 和 喜

I. 緒 言

アサヒエビグモ *Philodromus subaureolus* Böes et Str.は、北海道から九州にいたる各地で普通に見られる徘徊性のクモである（新海・高野、1984）。浜村（1982）は、このクモのカンキツ園での発生消長と幼体発育に及ぼす光周期の影響とを詳しく調べて報告している。しかし、浜村の論文によると、幼体が成体になるまでに要する脱皮回数は、まだ分っていないようである。

私は、1992年の6月から翌年の6月にかけてこのクモの幼体を飼育し、それらが成体になるまでに行つた脱皮の回数を調べてみたので、その結果を報告する。報告の内容が以下に見られる通りオスだけに限られているのは、無事に成体にまで発育した供試個体が不幸にも全てオスであったためである。したがつて、この報告の内容は、オスの飼育結果であつてメスのそれを欠く不完全なものになってしまった。しかしメスについての飼育結果を得るにはもう一度1年かかりの飼育を繰り返さなければならないが、それを実行する気力がなかなか出て来ないので、とりあえず今までに得られた結果を取りまとめ、ここに報告することにした。

II. 材料と方法

1992年の6月25日に東京都八王子市にある東京都立大学の構内で2匹のメス成体を捕えた。これらにキイロショウジョウバエを10匹ずつ1日おきに与えて飼育していたところ、6月28日と30日にそれぞれ卵のうを産出した。6月28日に生まれた卵は不受精卵だったためか孵化しなかつたが、30日に生まれたものは7月13日に孵化し、幼体は17日には分散を始めたらしく、飼育ピンの中を盛んにはい廻っていた。幼体の数は49であったが、この中から20匹を取り出し、直径25mm×高さ55mmのネジ蓋付のガラスピンに1匹ずつ入れ、7月18日より飼育を始めた。ガラスピンの中には巾5mm～10mmの短冊に切った厚紙を1枚ずつ入れ、クモの足がかりとした。9月以降ガラスピンは、ちよつかい35mm×高さ75mmのものに取り替えた。

飼育を行つた場所は、東京都立大学理学部の冷暖房の無い普通の室で、直接日光の当らない机の上である。しかし、11月から翌年6月までは、千葉県我孫子市の自宅の一室に飼育場所を変えた。両場所の条件は、ほぼ同じであったと思われる。飼育期間中は、供試個体を置いた机の上に最高・最低温度計を置き、毎週の平均気温を測定し、記録した。

餌にはいろいろな昆虫を用いた。飼育を開始した7月から10月にかけては、芝生を捕虫網で掬つて得られたトビムシ、ヌカカ、小型のユスリカ、ウンカ・ヨコバイおよびハエなどを混せて与えた。最初の10日間はこれらの中より小型のものを選んで3-4匹ずつ毎日、それ以降はクモの体の大きさに合つた大きさのものを選ぶようにして2-3匹ずつ2-3日おきに与えた。飼育場所を変えた11月から翌年の3月にかけては、水田の畦畔を掬つて得られたウンカ・ヨコバイおよびハエの仲間を2-3

匹ずつなるべく暖かい日を選んで7-10日おきに、4月から6月にかけては同様な餌を2-3日おきに与えた。飼育ビンの清掃は、適宜給餌の前に行つた。餌以外のもの、例えば水などは、一切与えなかつた。

III. 結果と考察

飼育結果の大要は、図1に示す通りである。

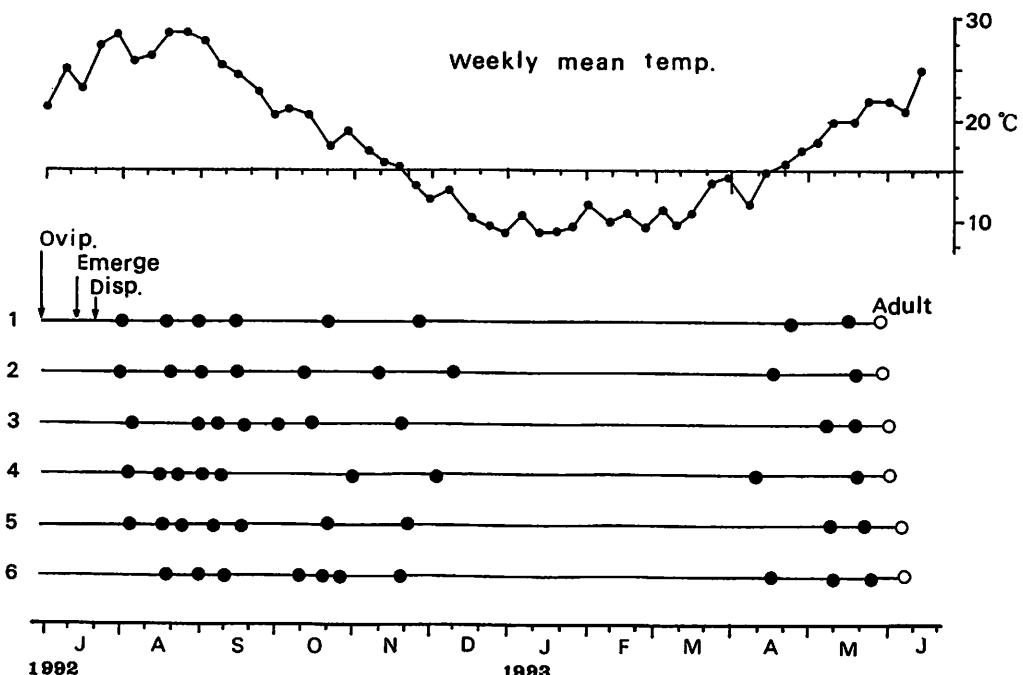


図1. アサヒエビグモのオス幼体の発育経過。左端の数字は個体番号、黒丸は普通の脱皮、白丸は最後の脱皮をそれぞれ示す。上段のグラフは飼育場所での週平均気温の推移を示す。

最初20匹で出発した供試個体は、その中の13匹が11月までに死亡し、さらに1匹が越冬中に死亡した。したがつて、成体にまで発育した個体数は、たつた6匹であった。しかもそれらのすべてがオスであった。死亡は飼育開始から15日目にかけての若令期間に最も多く起こつた(11匹)。この原因は、卵のうより分散したばかりの繊細な幼体を湿度を全く考慮しない条件下で飼育したためかも知れないが、詳しいことは分らなかつた。

図1を見ると、卵のうから分散した幼体が成体となるまでに要した脱皮回数は、個体によって9回から11回までの変異を示している。この脱皮回数は、クモの仲間の中では回数の多いほうに属する。メスについての結果は得られていないが、脱皮回数の多いクモの仲間では一般にオスよりメスの方が1~2回多く脱皮する傾向があるので、やはりこのクモのメスもオスより1~2回多く脱皮をするものと予想される。エビグモは、卵から孵化した幼体が卵のうの中で1回脱皮した後に分散するので(吉倉, 1987), この脱皮を加えると、卵のうからの分散個体は2令ということになる。そうすると、

卵から孵化した幼体は、成体になるまでに10 - 12令を経過することになる。また、越冬は8 - 9令の中令期で行われ、越冬後さらに2 - 3令を経過して、はじめて成体になるのである。越冬に入る幼体の発育段階や越冬後の幼体発育が光周期と密接な関係を持つている事実は、浜村（1982）によって詳しく調べられているが、越冬時の幼体が一体どんな生理状態にあるのかは、詳しくは調べられていないようである。

この飼育調査では、供試個体が越冬に入っているとみられる期間中（11月より翌年3月まで）も、餌は7 - 10日に与えつけた。その理由は、越冬期間中でも暖かい日にはほとんどの個体が餌を与えると摂食するのが認められたからである。図1の上段に示した週平均気温の水位を見ると、平均気温が10°C以下に下がった期間中は脱皮をするものが無かつた。この平均気温は室内のものであるので野外のそれより若干高い値を示していると思われるが、気温の季節変化の状態は良く示されていると思われる。11月より翌年3月までの間に最高気温が15°C以上に達していた週数を調べてみると20週中14週もあったので、このクモは、そうした暖かい日のあつた週では脱皮はしないが餌があれば摂食するのだと思われる。そうすると、このクモの越冬時の生理状態は、多くの昆虫で見られる摂食活動を完全に停止してしまういわゆる休眠とは少し違った生理状態にあるのではないかと考えられるが、詳しいことは分からぬ。

浜村（1982）は、成体の出現が6月に集中して起こり、越冬する幼体は大部分が中令期のものであることから、このクモは年1回発生の生活史を持つものと結論しているが、今回行なった私の飼育調査の結果も、メスについての結果を欠いているという欠陥をもつが、浜村の結論を指示する成績となつてゐる。

IV. 要 約

1992年の7月中頃に卵のうから分散した20匹のアサヒエビグモ幼体を冷暖房の無い室内条件下で個体飼育した結果、翌年の6月に6匹のオス成体を得た。これらの個体は越冬までに6 - 7回脱皮をして成体になった。卵の生まれた時点から幼体が成体にまで発育した時点までの期間の長さは12ヶ月であったので、このクモは年1回発生の生活史を持つものと考えられた。

V. 引用文献

- 浜村徹三, 1982. アサヒエビグモの発育に及ぼす光周期の影響. 応動昆26: 131-137.
新海栄一・高野伸二, 1984. フィールド図鑑—クモ 204pp., 東海大出版, 東京.
吉倉 真, 1987. クモの生物学 613pp., 学会出版センター, 東京.

モリアオガエルによるクモ捕食

徳 本 洋*

変態後のカエルの食性が動物食であることはよく知られているが、野外における食性のデータを示した報告は少ないようである。カエルの餌としてのクモを、クモの種名を明らかにし、クモとカエル、それぞれの生態をふまえて記録した例も、私は知らない。ところが、たまたま、私はモリアオガエルの生態を研究している金沢大学の戸田光彦氏から、モリアオガエル内容物のうちのクモを同定する機会を得たので、クモを中心とした立場でその結果を次に記録する。

なお、食性全般についての分析は、戸田氏によって進められているが、その一部は発表されている（戸田、1992a）。それで、クモ同好の方々への、その内容紹介も兼ねて、以下に記すことになる。

調査が行なわれたのは、金沢市の市街地中心に位置する金沢城址で、調査時期は1990～1992年である。ここは丘陵上にあり、かつては城野全周を囲んでいた堀も、明治時代にほとんど埋め立てられ、今はわずかに北の大手堀の一部だけが残って、水をたたえている。この城址は金沢大学の旧校舎敷地で、その大部分は裸地であり、そこに諸建築物が配置されているが、城址の外周を取り巻く急傾斜地と本丸跡だけは主に樹林地帯となっており、市街地中央に貴重な自然を残している。ここからは現在すでに1081種の動物が記録されているが（大串、1993），なお、調査は進行中で、その種数は増加を続けている。

この本丸跡は城址内で最も標高の高い平坦地で海拔約60m、面積約4haである。

こここの樹林にはモリアオガエルが、多く生息しており（加藤、1955, 1956；戸田、1992），この生物群集の重要な構成要素になっている（大串、1993）。なお、この本丸跡の中央部に小さな池が掘られており、この池の周囲の樹木の枝に、このカエルは産卵している。城址には、かつてニホンヒキガエルが多数いたことがあり（奥野、1984a,b,c,d）、アマガエル、ツチガエルなどの記録もまれにある（加藤、1955；戸田、1992b）が、現在はモリアオガエル以外のカエル見当たらない。

戸田が行なったカエルの胃内容物の採取方法は次のようにある（戸田、1992a）。このカエルの生態調査の際に捕まえた個体の腹部を触診し、胃内容物が存在するときは、口腔より胃へピンセットの先を挿入する強制嘔吐法によって、内容物を取り出す。その後は、カエルは再び放つが、カエルへの大きなダメージはなかったという。

また、繁殖期に池付近に集まっている繁殖参加個体は、雌雄ともにほとんど摂食していないが、この時期、池以外で採集される個体ではメスはかなり多くの個体が摂食しているのに対し、雄はまったく摂食していないという。また、体長32～80mmの40個体に対して強制嘔吐を行なって得た36種66個体の餌動物のうち、個体数で61%が昆虫、33%がクモ類であったという。

*〒921 金沢市泉野出町 1-2-6

私は、これらの餌となつたクモの全個体を検したのではないが、検し得た個体の結果は表のようである。

表. クモを含んでいたモリアオガエルの胃内容

番号	採取日	内容物の種類および数	
1 5.VII.'92.	ヤマトフクログモ	<i>Clubiona japonica</i>	1♂
	フクログモの一種	<i>Clubiona</i> sp.	1young
	イオウイロハシリグモ	<i>Dolomedes surfreus</i>	2♂♂
2 30.VII.'91.	イオウイロハシリグモ	<i>Dolomedes surfreus</i>	1♂
3 31.VII.'91.	オニグモ科? の一種	Araneidae? Gen. Sp.	1(脚1本のみ)
4 18.IX.'90.	ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	1♀
	フクログモの一種	<i>Clubiona</i> sp.	1♀ subadult
5 2.X.'90.	ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	2♀♀
	アオバハゴロモ	<i>Geisha distinctissima</i>	1adult

表中の個体番号1から4のカエルの胃にはクモのみが入っていたが、個体番号5にはジョロウグモの他に、昆虫のアオバハゴロモが入っている。

また、この表からは夏季にはイオウイロハシリグモ成体が、また秋季にはジョロウグモ成体が餌としてよく利用されていることが分かる。この両種のクモは共にかなり大型のクモである。これらのことから戸田(1992a)は、このカエルは比較的大きな餌を数少なく食う、と考えている。その点では、金沢城本丸跡はイオウイロハシリグモ、ジョロウグモ共に生息個体数が多いので、これらがこのカエルのよい餌動物となっているものと思われる。

ところで、イオウイロハシリグモ、ヤマトフクログモはいずれも徘徊性種で前者は低木、草間によく見られ、後者も草間・樹葉間をよく徘徊する。従つて、これらのクモは、樹上性種であるモリアオガエルにとっては、遭遇機会が多いクモと思われる。フクログモの一種と記してあるクモ幼生は腹部に矢はず状斑紋があり、ヤマトフクログモにも似ていたので、これも樹上徘徊していた可能性は大きい。

なお、本報告に載せられたイオウイロハシリグモが4例ともに雄成体で、メス成体の例がないが、これは偶然そうなったのか、それともなんらかの必然性があるのかは、このような少数例からは判断しがたい。もし、しかるべき理由があるとすれば、その解明は今後の問題となろう。

ところでこれら徘徊性クモに対し、ジョロウグモの法は円網を張り、その上に終日占座するクモなので、普通に考えればこのカエルの餌にはなりにくいうにみえる。しかし秋季の餌としてジョロウグモがかなり利用されているようなので、どのような場合にこのクモが捕食されるのかについて感心がもたれる。また、餌になっているオニグモの一種は、あるいは、この場所にときどき見られるオニグモのような種であった可能性がある。このクモは夕方に円網を張り、その中央に占座するが、昼間は樹葉の間などに潜んでいる夜間活動性の種である。これもジョロウグモ同様、餌とし

て捕食されるのはどのような時なのか不明である。このような造円網クモが、樹上性カエル（モリアオガエル、アマガエルなど）によって捕食される様子について、ご存じの方があれば、教えていただきたい。

なお、本丸跡には大型の造円網性クモでは、コガネグモ *Argiope amoena* が少数、中型の造円網性のものではコガタシロカネグモが多数生息するが、いずれも草間に造網しているためか、今回検した捕食例の中にはなかった。円網性以外の造網性クモでは棚網を春クサグモが多いし、小型のクモでドーム網を張るアシナガサラグモ、かご網を張るヒメグモも多いが、これらの捕食例も見なかつた。

終わりに、モリアオガエルの胃内容物を検する機会を与えていただいた戸田光彦氏に厚く感謝する。

文 献

- 加藤憲一, 1955. 産卵期におけるモリアオガエルの生態について. 第1報. 日生態誌, 5(2) : 70-71.
- _____, 1956. 同上. 第2報. 産卵時の行動・その他. 日生態誌, 6(2) : 57-61.
- 大串龍一, 1993. 金沢城址の動物相金沢大学開放センター紀要, 13 : 107-118.
- 奥野良之助, 1984a. ニホンヒキガエルの自然誌的研究 I. 生息場所集団とその交流.
日生態誌, 34 : 113-121.
- _____, 1984b. ニホンヒキガエルの自然誌的研究 II. 活動性と起床条件の関連.
日生態誌, 34 : 217-224.
- _____, 1984c. ニホンヒキガエルの自然誌的研究 III. 活動性の季節変化と終夜変化.
日生態誌, 34 : 331-339.
- _____, 1984d. ニホンヒキガエルの自然誌的研究 IV. 変態五の成長と性成熟年令.
日生態誌, 34 : 445-455.
- 戸田光彦, 1992a. 金沢城址におけるモリアオガエルの食性. (講演要旨).
爬虫類両棲類学雑誌, 14(4) : 208.
- _____, 1992b. 金沢大学丸ノ内キャンパスで記録された両棲類、爬虫類.
金沢大学植物園年報, 15 : 17-23.

千葉県清澄山におけるジョロウグモの個体数密度の年変化
20年間（1974年～1993年）のとりまとめ

新 海 明*

The annual change of the population density of
Nephila clavata at Mt. Kiyosumi, Chiba Prefecture

Akira SHINKAI*

クモ類の個体数の年変化を記録したものは日本ではほとんどなかつた。最近になり徳本（1990）は石川県金沢市の市街地と郊外でのジョロウグモ *Nephila clavata* の個体数の年変化を10年余りに渡って調査した結果を報告している。筆者が知る限りでは、この報告以外に日本でクモ類の個体数の年変化を長期的に一定の方法で継続して調査した記録はない。

筆者は、1974年から千葉県の房総丘陵にある清澄山でジョロウグモの個体数密度の年変化を調べてきた。ここは東京大学農学部の演習林があるため調査を始めた頃と変わらぬ自然景観が現在も保たれている。つまり、自然下でのクモの個体数が毎年どのように変化するかを調べるには絶好の地域といえる。ここでは、ロードセンサス法で20年間に渡り調査してきた結果を報告する。

本稿をまとめるにあたり、東京大学農学部演習林研究部の蒲谷肇氏には20年間に渡り調査を遂行する上であらゆる便宜をはかつていただいた。また、宮下直氏には数々の有益な助言や統計処理でお世話になった。加藤輝代子氏には調査の手伝いをお願いした。ここに心から御礼申し上げる。

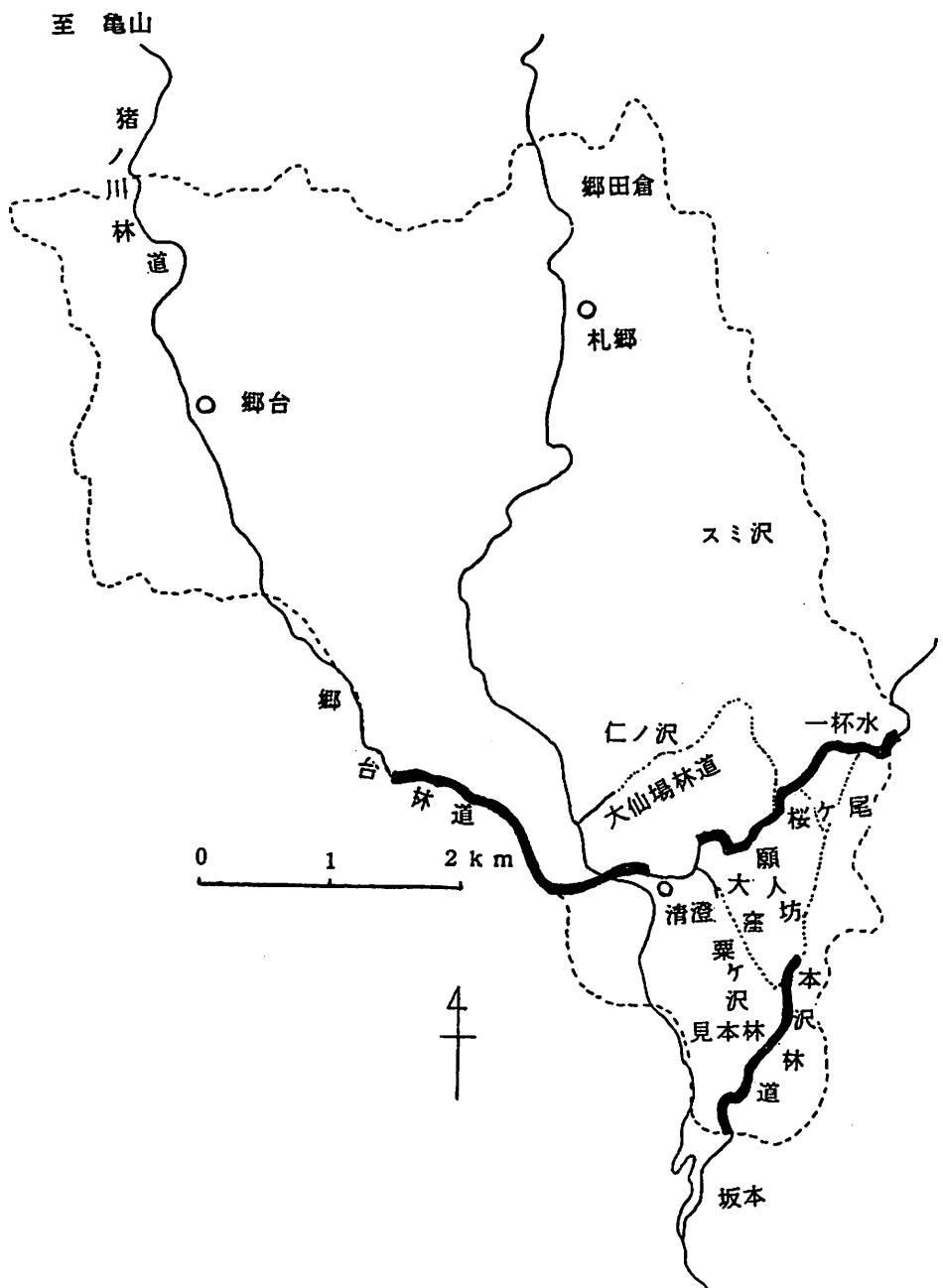
調査地と方法

調査は、千葉県天津小湊町から君津市にかけてひろがる東京大学農学部附属千葉演習林内の郷台林道と一杯水林道、本沢林道において行った（図1）。郷台林道は房総丘陵の分水嶺にあたる尾根沿いを走り、比較的開けた明るい林道であるのに対して、一杯水林道は同じく尾根部にある林道だが、スギ・ヒノキ林の間を通るため暗い所が多くある。また、本沢林道は太平洋にそそぐ二間川沿いの沢部を通る林道であるが、ここは南に向けて開けているので明るく暖かい場所である。いずれも、常緑・落葉広葉樹林やスギ・ヒノキの人工林が点在する中を通る林道である。ジョロウグモの計数はこれらの林道に100mごとに打つてあるクイの間に生息していた雌の個体数を、ほぼ一定の速度で歩きながら数えるというロードセンサス法で行った。各林道ごとの調査に要した歩行距離は郷台林道（V0～V25）2500m、一杯水林道（S0～S23）2300m、本沢林道（T0～T23）2300mであ

*〒185 東京都国分寺市本多1-6-6

つた。このうち、本沢林道での調査は1988年以降はヒルが多くなり中止した。調査時期はジョロウグモが成体になった直後と考えられる9月中～下旬とした。ただし、1976年だけは10月10日だった。

図1. 消澄山の調査地概念図



結果および考察

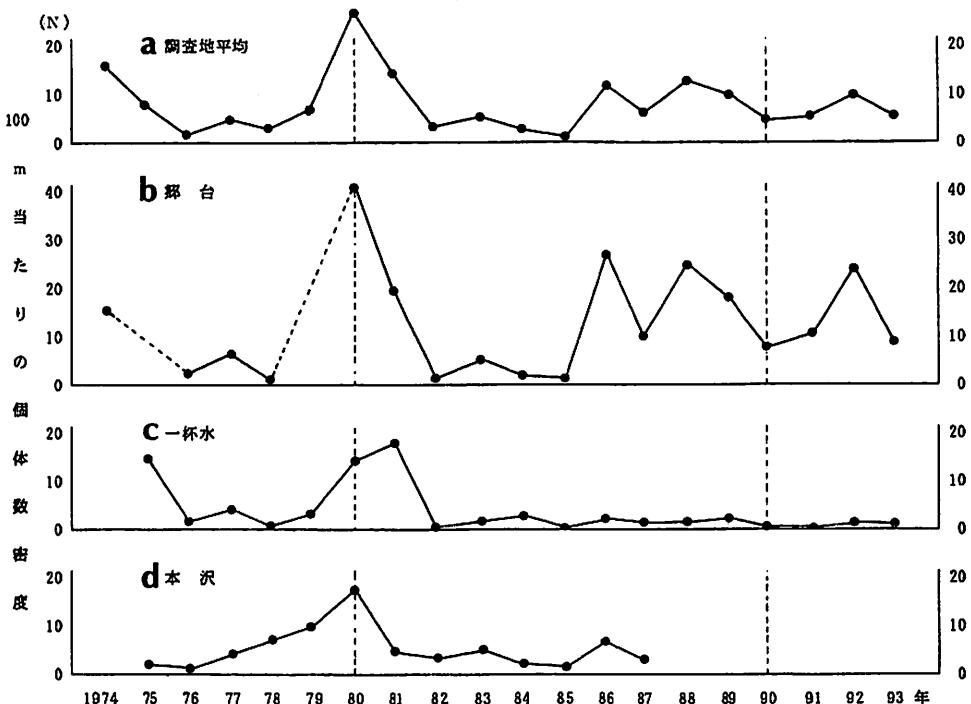
ジョロウグモの個体数密度の年変化

清澄山（3調査地平均）でのジョロウグモの100m当たりの個体数密度の20年間の変化をみると、最も多かつたのは1980年の24.0個体であり、最も少なかつたのは1985年の1.3個体であり、その振れ幅は18.5倍であった。おおざっぱに見る限り、大きな減少期が1976年から1978年と1982年から1985年にみられ、増減後に減少しているかの印象があるが、その後は増減は見られずに比較的緩やかな増減を繰り返して現在に至っている。個体数密度の増減には周期的な規則性ではなく、全体としては不規則な増減を繰り返しているようだ。（表1、図2-a）。徳本（1990）も金沢市の郊外でのジョロウグモ個体群で指摘しているが、人為的擾乱を受けず植生などの外観が調査期間を通じて変化していないにもかかわらず、その個体数が急激な増減を繰り返していることは注目に値する。時に自然が豊かな場所であるなら、クモの個体数もほぼ一定に保たれているはずという言質を聞くことがあるが、ここに示した結果はこの期待を見事に裏切っている。年によってかくも違うのである。

表1. 清澄山におけるジョロウグモ個体数密度の年変化（1974～1993）。
数値は100m当たりの個体数を示す。

	1974	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93
郷台林道	15.5	..	2.2	5.9	1.1	..	41.9	20.9	1.3	5.2	2.1	1.6	28.1	11.1	25.9	18.7	8.6	10.4	24.3	9.2
一杯水林道	..	13.4	1.7	3.4	0.8	2.8	14.0	18.5	0.8	1.9	2.4	0.5	2.2	1.3	1.5	1.8	0.8	0.5	1.6	1.1
本沢林道	..	1.9	0.8	3.9	7.0	10.6	16.5	4.6	3.6	4.8	2.0	1.8	6.6	3.9
平 均	15.5	7.7	1.6	4.4	2.9	6.7	24.0	14.7	1.9	3.9	2.2	1.3	12.3	5.9	13.7	10.3	4.7	5.5	13.0	5.2

図2. 清澄山におけるジョロウグモの個体数密度の20年の変化。



次に調査地別に見てみる。郷台林道での最多は1980年の419個体で最少は1978年の1.1個体で、その振れ幅は38.1倍にもなった(図2-b)。一杯水林道での最多は1981年の18.5個体で最少は1985年の0.5個体で、その振れ幅は37.0倍であり(図2-c)、本沢林道での最多は1980年の16.5個体で最少は1976年の0.8個体で、その振れ幅は20.6倍であった(図2-d)。後述の2地域は1982年以降は個体数密度がかなり低下したままで推移している。このうち一杯水林道の場合は調査当初の頃に比べて樹木が成長し林道全体が覆われてしまい暗くなつたことがその一因かも知れない。一方、郷台林道では林道の片側はよく開けているので樹木に覆われる場所が少なかつたことがこのような違いが生じた原因かも知れない。後述のように、郷台林道においても樹木が林道全体を覆うような場所にはジョロウグモが少ない傾向がみられた。本沢林道については1988年以降調査を行っていないので除外する。

郷台林道での出現パターンの検討

郷台林道は房総丘陵の分水嶺を東西に走る尾根沿いにあり、清澄作業所を出発して暫く続く樹木などのない場所(V0~V3)や、常緑広葉樹林内の暗い場所(V5~V7, V9~V10)を除けば、調査地の大部分は南側が開けた明るい場所を通っている。ジョロウグモは比較的明るい場所に多く出現し、暗い場所や造網の足場がない場所では当然ながら個体数が少なかつた(表2)。毎年少しづつクイが失われていったため、1985年に新たにクイを打ち直したがそれでも何箇所かのクイがその後の5年間に無くなっている。そこで比較的クイが安定して存在し、環境条件が同じような場所であるV14からV25までを対象としてジョロウグモの出現傾向を検討してみた。

表2. 郷台林道でのジョロウグモの出現パターン(1985~1989)。
上段の数値はクイ番号、下段は100m当たりの個体数を示す。

	V0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
1985	0	0	0	0	0	4	5	1	3	0	3	1		1	0	2	2	2	2	1	0	0	0	14	0	
1986	3	0	0	5	22	0	2	20	33	4	41	20		17	82	63	33	46	36	61	25	60	28	75	25	
1987	0	0	4	3	4	2	4	10	14	7	15	---	70	---	9	18	7	6	14	8	4	14	26	17	11	
1988	0	0	2	4	10	1	10	44	24	2	25	---	156	---	37	50	17	37	22	41	27	42	41	24	6	
1989	0	0	1	0	3	0	1	19	25	3	11	---	57	---	39	55	37	2	22	36	17	31	---	84	---	

1985年から1989年までの5年間で、この区間の最多と最少の出現個体数をみると85年はそれぞれ14個体と0個体、86年は82と25、87年は26と4、88年は50と6、89年は55と2であった。1985年はジョロウグモが激減した年であり、1986年と1988年は増加した年であるが、いずれの年も最多と最少個体数の振れ幅は極めて大きいことが判る。実際に観察した印象でも、ジョロウグモが互いに他個体の足場糸を利用しながら集団となり造網している場所があるかと思えば、全くいない場所もあり、パッチ状に出現するのが常であった。

次に、毎年特定の場所にジョロウグモが多数出現する傾向があるかどうか検討した。対象区間は前述と同じだがV22~25は1989年にはクイが消失しているため省略して、V14~22までの8区間を対象として、1985年~89年のこの区間の各々を「ブロック」として一元分散分析の乱塊法で検定す

ると有意 ($P<0.02$) となつた。つまり、年によらず特定の場所で個体数が多い傾向があるということを示している。このことは、年ごとに個体数が多い方から区間に順位を記すとわかりやすい（表3）。これをみるとV15～16は年によらず常に多く出現し、V20～21は毎年少ない傾向があることが判る。

表3. 姫台林道でのジョロウグモの出現パターン（1985～1989）の検討。
表中の数値は各年度内での出現個体数の順位（1位～8位）を多い順に示したもの。

	V14	15	16	17	18	19	20	21	22
1985	6	1	1	1	1	5	6	6	
1986	1	2	7	5	6	3	8	4	
1987	4	1	6	7	2	5	8	2	
1988	4	1	8	4	7	3	6	2	
1989	2	1	3	8	6	4	7	5	

個体数密度の変動要因

ジョロウグモの個体数の変動要因として、かつて筆者は気象条件の分析をした（新海, 1985）。清澄山での1974年から1983年までの10年間の気象データを基にして、年平均気温・年平均最高気温・年平均最低気温・1,2月の平均最低気温・7,8月の平均最高気温・年間降水量・4,5月の降水量・日照時間・年平均風速・6,7,8月の平均風速などについて検討したが、いずれも個体数密度との相関関係は認められなかつた。しかし、1980年前後は3調査地とも個体数がピークを示しており、集団間に交流があると思えない調査地間でこうした同調性がみられたということは、やはり気象条件が関与しているのかもしれない。

現在のところ、清澄山でのジョロウグモの変動要因は全く不明である。ここでは20年間の変化を紹介し記録にとどめるだけにする。

引用文献

新海 明, 1985. ジョロウグモ *Nephila clavata* の個体数密度の年変化について

(2) 清澄山における1974年～1983年のとりまとめ. 清澄,(11): 1-3.

徳本 洋, 1990. 金沢市街地内の定点におけるジョロウグモの生息密度の経年変化

(1977～1989年) と近年における著しい生息密度の低下について. *Atypus*,(95): 18-26.

樹上に住居を作るキシノウエトタテグモについての新知見

畠 守 有 紀

はじめに

キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* は神社、寺院、旧家の庭に多く、地中に縦穴（崖地では横穴）を掘り、入口に片開きの扉をつけるクモである（新海・高野、1984、八木沼、1986、など）。しかし筆者らはキシノウエトタテグモが樹上にも住居を作ることを見いだした。樹上に住居を作るキシノウエトタテグモは1991年7月9日と7月16日に京都大学理学部付属植物園でクモタケ *Nomuraea atypicola* を1個体ずつマルバチシャノキ *Ehretia Dicksonii* から採集したのがきっかけで発見されたのであつた（新海・畠守・横山、1992）。

今回あらためて、同所で樹上に営巣したキシノウエトタテグモの樹上での住居の分布状態を調査し、営巣する条件について考察を行つた。

本稿をまとめるにあたり、原稿の校閲をして頂いた吉田真氏と新海明氏にお礼申し上げる。

調査方法

この調査では京都大学理学部付属植物園内のマルバチシャノキ（A、B）に営巣しているキシノウエトタテグモを対象とした。

それぞれの樹木の幹の部分（図1）の住居について、ふたの長径と住居位置を調べた。ふたの長径は1mm刻みで、また住居位置は1cm単位で調べた。表皮を図2のように北東側から切り開いた形でグラフに表した。基本的にふたがある住居のみを対象としたが、ふたなしでも住居内の糸がしつかりしてキシノウエトタテグモの住居であると考えられたもの（図2、3、4の×印）は記録を入れた。またひとつの個体が2つのふたを持つ住居を作った場合は、ふた同士を線でつないで表現した（例：●—●）。住居内のクモの生死については確認しなかつた。

結果

Aのキシノウエトタテグモの住居数は27個（図3）、またBの住居数は49個（図4）であり、両木で確認したキシノウエトタテグモの住居は合計76個であつた。ふたの長径の頻度分布は2山であり、8mmから9mmのところで途切れている（図5）。しかし、ふたの長径の累積個体数百分率をCassieが提唱した方法により確率紙上にプロットしたところ、3種類の直線を描いた（図6）。すなわち巣のふたの長径が5mm未満のもの、5mm以上9mm未満のもの、9mm以上のものである。以下、それ小、中、大とする。

樹上に生息するキシノウエトタテグモの住居数をサイズ別に見ると、Aでは小18個（66.7%）、中6個（22.2%）、大3個（11.1%）、またBでは小34個（69.4%）、中12個（24.5%）、大3個（6.1%）

であり、Aで大の%がやや高い他はA、Bで同様の傾向を示した。

住居の分布状態を方角で見ると、Aでは法則性はとくに見られなかつたが、Bの場合は西から南には住居が少なく、東から北にかけての面に最も多く分布していた（図4、表1）。どちらの木でも、表皮がはがれて固い材がむき出しになつた場所には、住居は少なかつた（図3、4、表3）。

住居の分布状態を地表からの高さで見ると、どちらの木でも25cm以下で最も多く、高くなるにつれて少なくなることがわかつた（表2）。

考 察

従来、キシノウエトタテグモは地中に、キノボリトタテグモは主に樹上に営巣するとされてきた（八木沼、1986）。筆者らも1991年に樹上で確認されたキシノウエトタテグモの住居をまれな例と考えていた（新海・畠守・横山、1992）。

しかし今回の調査でAでは $100m^2$ あたりに0.57個の住居が、Bでは0.49個の住居があることがわかつた。この値は1985年に山道が滋賀県大津市近江神宮でキシノウエトタテグモの棲息密度を調査した値と比べても高い（1~6の各地点で棲息密度を調べたところ、0.32個/ $100m^2$ ~0.71個/ $100m^2$ の範囲であり、平均0.44個/ $100m^2$ であった。）（山道、1986）。これより樹上であつても地面と同等に住居を作る場合もあることがわかつた。

樹上にさまざまなサイズの住居が分布しているが、これらは大、中、小の3つの個体群に分けられる。キシノウエトタテグモのサイズが3つに分けられることは近江神宮における1985年の山道の調査、および1989年の調査でも同様であつた（山道、1986、畠守・横山、1991）。このことは、小が今年生まれ、中が去年生まれ、大が一昨年生まれであることを示しているのかもしれない。しかしキシノウエトタテグモの令構成については、今後さらに野外観察と室内観察を定期的に行うことで明らかにする必要があるだろう。

いずれにせよ住居の数が多いこと、さまざまなサイズの住居が分布していることから、このマルバチシャノキには常にキシノウエトタテグモが営巣していると思われる。野外でキシノウエトタテグモの住居を観察していると平地よりも石垣の隙間や切り通しの崖のような斜面を好むように思われるが、この樹上に営巣したクモは樹木を崖のような斜面と思ったのかもしれない。

キシノウエトタテグモの住居の方角と日照の間には、Aでは特に法則性はなかつたが、Bの樹木では明らかに東から北に住居が多かつた（図3、4）。しかしこれは方角と日照の関係よりもむしろ住居の土台となる部分の固さが関係していると思われる（図4、表3）。

キシノウエトタテグモの住居はもともとが地中に穴を穿つタイプ（図7-b.）であり、キノボリトタテグモの住居は樹木の幹に張りつけるタイプ（図7-a.）である。キシノウエトタテグモの住居の構造では材のように固い部分に巣を作りにくくと思われる。実際にAのように表皮のはがれの少ない場合、クモの住居はほぼ全方角に分布しているのに対して、Bのように表皮のはげ落ちたところではクモの住居がほとんど確認されず、わずかに4個体が材を細かくかみ碎いて寄せ集めたような住居を作っているだけある。基質による単位面積あたりの住居数を比較すると、明らかに樹皮の方に住居が多いのがわかる（表3）。

植物園には多くの樹木が植えられているが、マルバチシャノキ以外の樹木からキシノウエトタテ

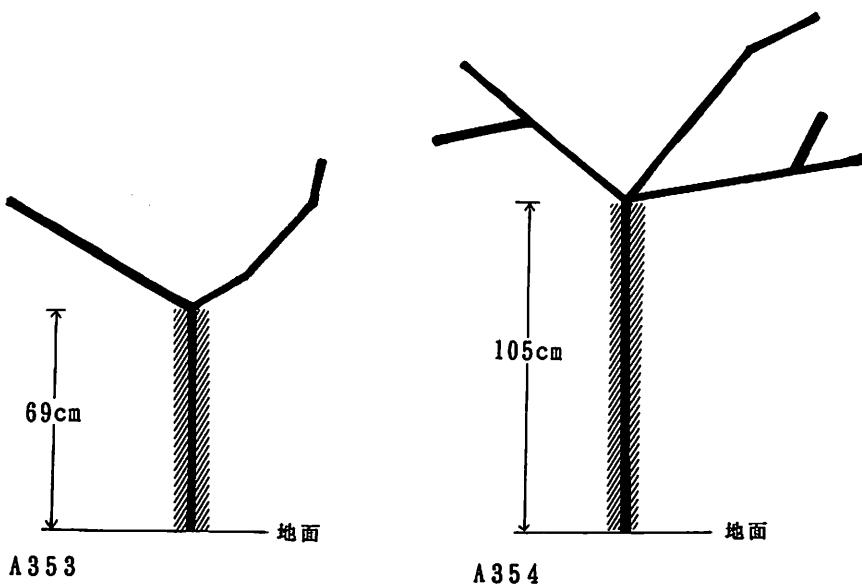


図1. 調査したマルバチャノキの概念図。斜線部が調査範囲である。

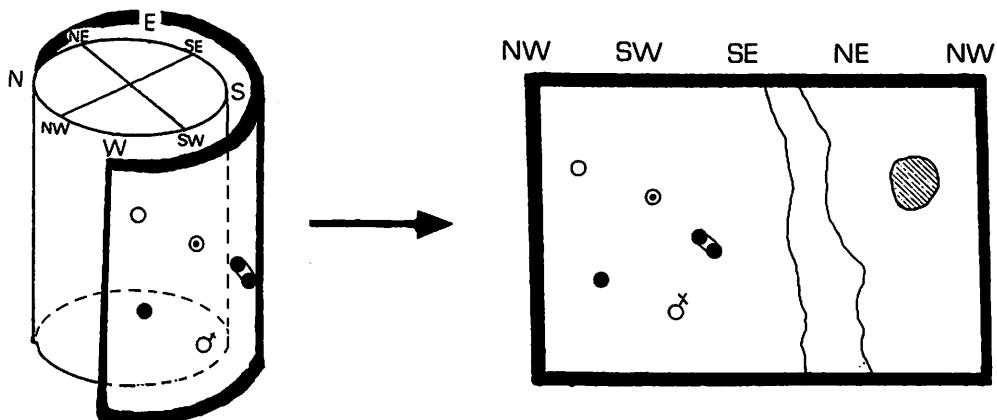


図2. キシノウエトタテグモの住居の位置の表示方法。

白丸、黒丸、二重丸はそれぞれふたの長径が5mm未満、5mm以上9mm未満、9mm以上の住居を示す。×はふたのない古い住居である。網掛けの部分は樹皮がはがれて材がむき出しの部分である。斜線部は穴の部分である。

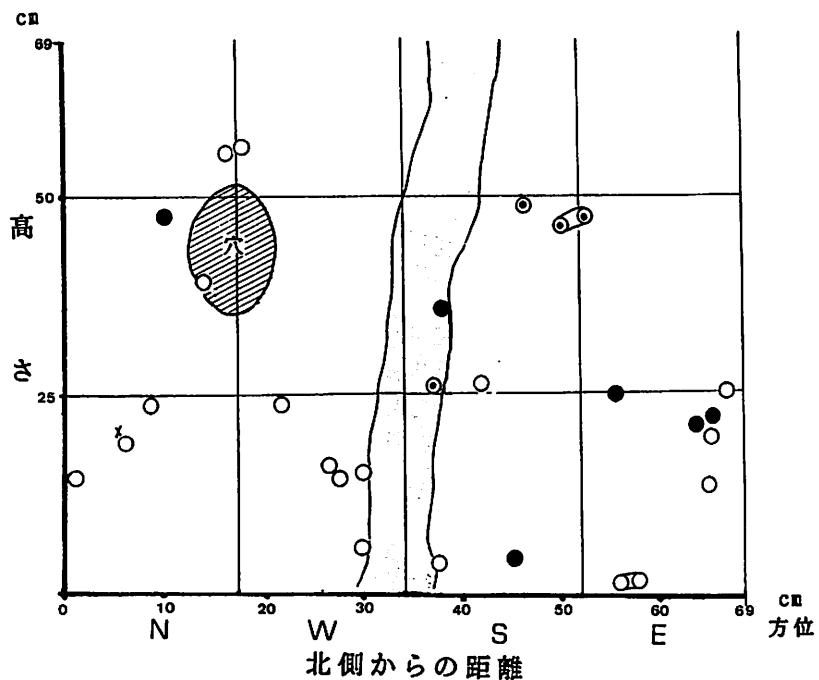


図3. Aにおけるキシノウエトタテグモの住居の分布. 材の部分は樹皮がなく堅い. 穴の部分は材もなく空洞である.

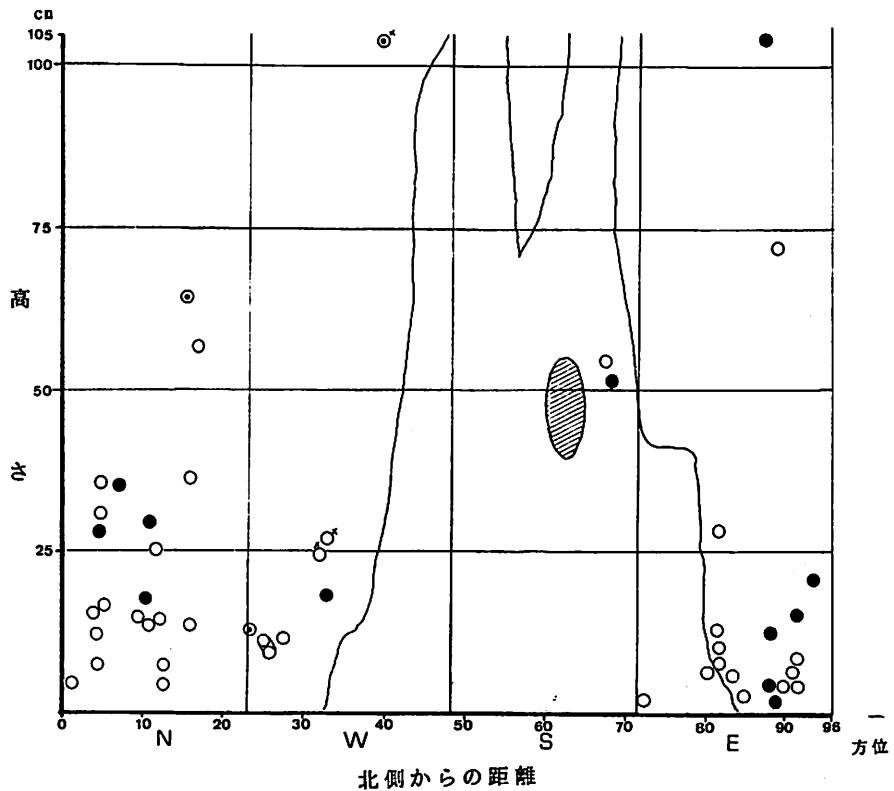


図4. Bにおけるキシノウエトタテグモの住居の分布.

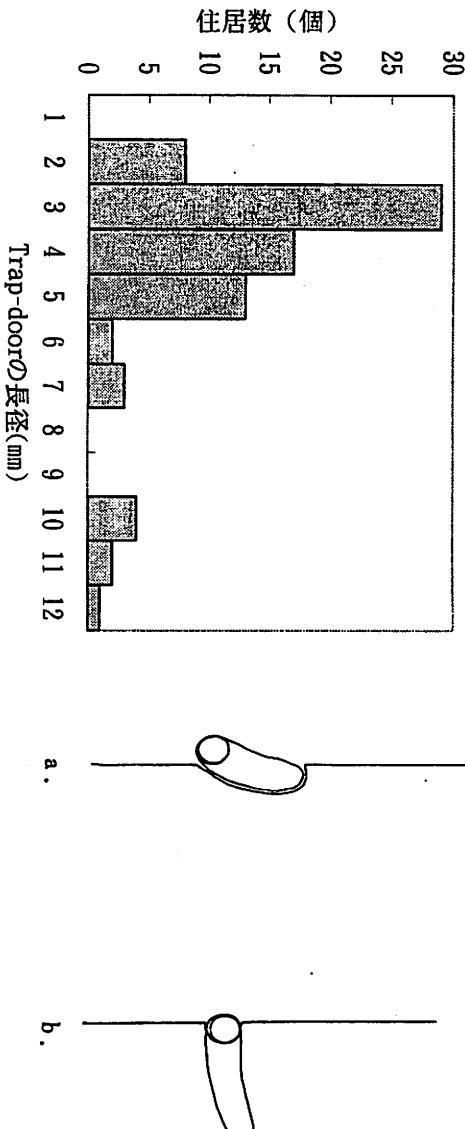


図5. Trap-doorの長径と住居数の関係を示したヒストグラム.

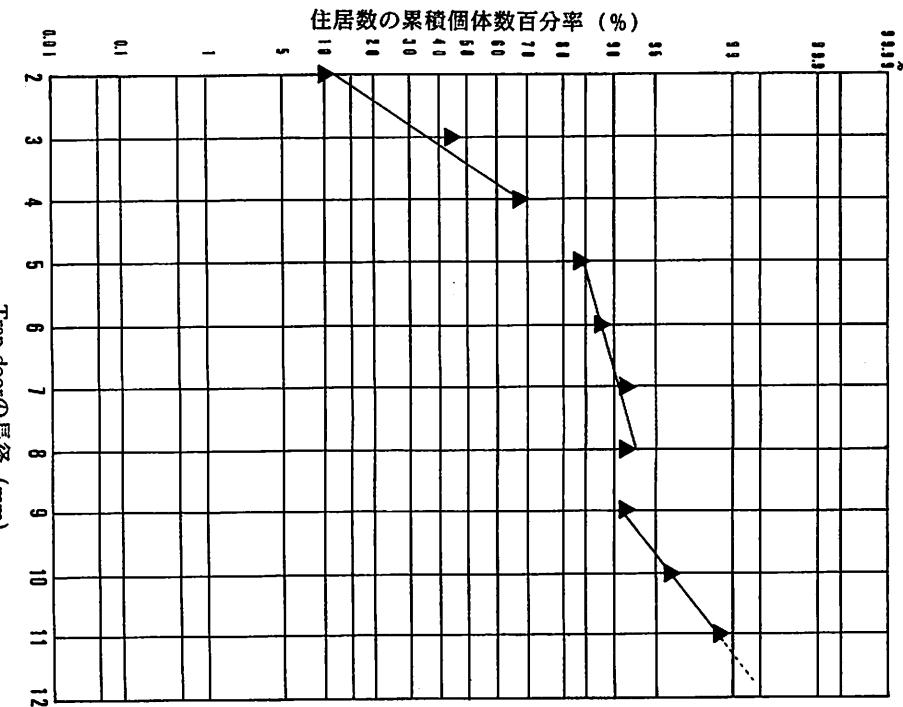


図6. Trap-doorの長径と住居数の累積度数百分率の関係.

図7. - a. キノボリトタテグモの住居の概念図.
- b. キシノウエトタテグモの住居の概念図.

表1 住居の方角と住居数

方角	A	B
N (N E-N W)	7	21
W (N W-S W)	6	7
S (S W-S E)	7	2
E (S E-N E)	7	19

表2 住居の高さと住居数

高さ (cm)	A	B
0-25	16	32
-50	9	10
-75	2*	5
-100	-	0
101以上	-	2**

*69cmまで, **105cmまで, -は調査せず,

表3 住居の基質と単位当たりの住居数

基質	A			B		
	住居数 (N)	基質の面積 (S) cm	N/S	住居数 (N)	基質の面積 (S) cm	N/S
樹皮	23	3939	0.0058	45	5961	0.0075
材+穴	3	822	0.0036	4	3255	0.0012

グモは確認できなかつた。これはクモがとくにマルバチシャノキを好んでいるように見えるが、その原因は他のどの樹木も樹皮が薄いこと、材が固いことにあると思われる。マルバチシャノキの樹皮は厚いコルク質でできており、ちょうどコケの中に住居を作るのと同じなのであろう。またマルバチシャノキ以外の樹木であつてもキシノウエトタテグモは営巣する。筆者は1993年にクモタケ調査を行つた時に、複数の地域で樹上から採集されたクモタケ4個体の寄主を確認したが、すべてキシノウエトタテグモであった。このうち2個体は朽ち木から採集されたものである。朽ち木で材まで分解されているものは非常に柔らかく、キシノウエトタテグモが土の上に営巣するのと同じなのだろう。このように、キシノウエトタテグモはある程度柔らかいところであれば地面上に限らずとも住居を作ると考えられる。どの程度の硬度ならキシノウエトタテグモが営巣できるかについては、今後さらに詳しい調査が必要と思われる。

キシノウエトタテグモの住居が地上50cm未満に集中していることについては、はつきりしたことはわからない。ただ、同じ樹上でも高すぎる所では直射日光や雨などが直接かかり営巣に適切でない、あるいは下の方が倒が多いためなのかもしれない。

これらの樹上のキシノウエトタテグモがここで繁殖した個体であるのか、それともすべてよそからやって来た個体であるのかについては、今後定期的に住居の分布状態を調べることによって明らかにできると思われる。

引用文献

- 新海 明・畠守有紀・横山和正, 1992. 樹上に住居を作るキシノウエトタテグモ. *KISHIDAIA*, (64) : 39.
山道秀子, 1986. キシノウエトタテグモに寄生するクモタケに関する研究. 滋賀大学教育学部卒業論文.
畠守有紀・横山和正, 1991. クモタケの生態 - 寄主と寄生者の関係 -. 冬虫夏草, (11) : 2-7.

DRAGLINES

クサグモの網上の餌を横取りするアリ

宮 下 直

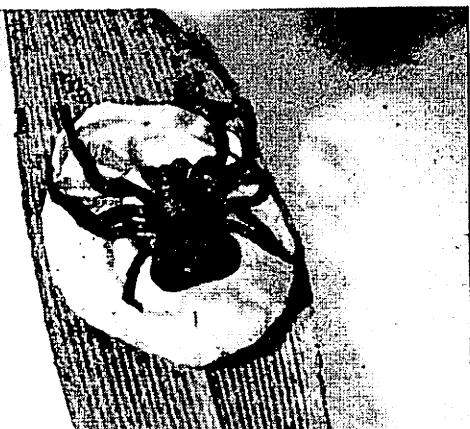
クモの網にかかつた餌や食べ残しを盗む昆虫類は、双翅目やシリアゲムシ、狩りバチなどでよく知られている。筆者はアリの一種がクサグモの網にかかつたアブラムシを巣外へ運んでいくのを観察したので報告する。

観察は1994年6月8日に東京都田無市にある東京大学農学部付属演習林田無試験地で行なった。ヒイラギの生け垣上に造網していた体長約5mmのクサグモの網上で、体長3~4mmのアリが動いているのを発見した。よく見ると、アリは網にかかつて動けなくなつた体長約1mmのアブラムシ有翅虫を網から引き離す最中であった。アリはアブラムシを網から取り外すと、枝を伝わって地面の方向へ運んでいった。網の周囲や枝・葉上には同種と思われる他のアリも数頭徘徊していた。これらのアリはいずれもクサグモの網（多数ある）への侵入を試みている様子であった。この生け垣は高さ1m足らずの低いもので、他にアリの餌となりそうなものは見あたらなかつた。したがつて、このアリはクモの網上の餌を探ることを目的に樹上を徘徊していた可能性が高い。後日、採集したアリを東邦大学の梅田泰佳さんに同定してもらったところ、シリアゲアリの一種であることが判明した。ここに御礼申し上げる。

マツモトオチバカニグモと卵のう

工 藤 泰 恵

1994年7月14日に千葉県柏市根戸の自宅庭で、マツモトオチバカニグモ *Oxyptila matsumotoi* の♀成体を採集しました。椿の木の根元の、椿の落葉が重なっているすき間にあったアズマネザサの枯葉（3cm×0.65cm）の内側に卵のう（0.55cmの円形、白色）をくつづけて母グモが上で守っていました。葉をつまみ上げ、家の中まで手でもつて入つたのですが、母グモは全く動きません。あまり動かないで死んでいるのかと思いましたが、ちゃんと生きていました。ケースに入れて観察を続けたところ、7月30日に、約20頭の子グモ（体長1mm）が卵のうから出て歩き始めたので全部庭に放し、母グモのみ観察を続けました。しばらくは元気にしていましたのですが、この夏の異常な暑さのせいか、寿命だったのか9月28日に死亡。アルコール標本にして小野先生に同定して頂きました。いろいろご面倒をおかけした小野先生に、心からお礼申し上げます。



ツユグモのオスの腹部のスジはだんだん赤くなる

小野展嗣

昨年（1994）9月初旬、新海栄一氏と一緒に福島県のクモの調査を行った。その折り、耶麻郡中ノ沢温泉の近くの草原にツユグモの幼生（体長7~8mm）が多数生息していた。1頭だけ生かして持ち帰り、東京の研究室で飼育を始めた。餌にはチャバネゴキブリの幼虫をふんだんに与えたところ順調に成長して、4回の脱皮を経て、12月2日に成体のオスになった。成体のオスは、終令の幼生よりひとまわり小さくなつた感じで、色もはじめの1週間は真緑色であつた。しかし10日目頃になるとだんだん緑色がうすれ黄緑色となり腹部背面のたてスジが明瞭になってきた。そして、13日目にはくすんだ赤色になつた。

この赤いスジはオスにしかみられないが、何か婚姻と関係があるのだろうか。メスと出会う前に赤くなることは確かなので、メスをみて興奮して赤くなるわけではなさそうである。せつかくの保護色をわざわざ目立つ赤に変えるのであるから、メスに対して何か意味の有る赤スジなのであろう。一度交尾をみてみたいものである。

ユカタヤマシログモの卵のう保持姿勢

新海明

東京都立川市にある自宅で今年（1993年）の夏にユカタヤマシログモ *Scytodes thoracica* のメスの成体を採集し、管ピン（直径1.2cm、長さ6cm）内で飼育していたところ9月12日に産卵した。本種の飼育例は比較的たくさんあり、出のまでの期間や餌の捕獲法については報告されている（池田,1987：クモ生理生態事典）。しかし、卵のう保持については「糸で薄く包み口器につけて持ち運ぶ（新海,1969：東京都産真正蜘蛛類）」とされるだけで、それ以外の記録はなかった。筆者は飼育中に簡単な実験をして卵のう保持について新知見を得たのでここに報告する。

ユカタヤマシログモは室内を徘徊していることから、筆者は卵のうを体に抱えこみ保持したまま歩行しているというイメージがあつた。ところが、このクモはふ化までのほとんど全ての期間、その卵のうを腹の上に乗せるようにして保持していたのである。つまり、クモは背面を下に向かって卵のうの一方に糸疣からのびた糸をつけ、他の一方を触肢で持ち卵のう全体を腹に乗せるようにして持っていたのである。このとき、管ピンには多数の糸が張られており、クモはここに足をかけて逆になって静止していた。この状態がたまたまなのかどうかを調べるために、管ピンを逆に回転させてクモの背面が上になる（つまり、卵のうを下に抱える）ように動かしてみた。すると、クモはすぐには反応せず平均で30分後（最長72分、最短11分）に体の位置を変えて再び背面を下にする元の姿勢に戻った。この小実験は卵のう保持期間中9回ほど行ったがいつも同様であった。クモが体位を変えるのはある時間が経つ後に短時間で起こり、少しづつ変化することは稀であった（1例観察）。本種の産卵から出のまでの期間は約3週間（9月12日産卵、10月6日出穢だったので産卵か

DRAGLINES

ら出巣までに24日、卵嚢を保持している間は餌捕獲はしなかつた)でありこの期間中ずっと卵のうを抱えているのは母グモにとってかなりの負担と考えられる。ところが、腹の上に乗せているのであれば負担はずつと軽減されるだろう。つまり、このような卵のう保持の姿勢は大変に理に叶つたものといえよう。

自然下で本種の卵のうがどのようにして保持されているか筆者は知らないので、情報をお持ちの方はお知らせ願えれば幸いである。

小網代でチュウガタシロカネグモを採集

谷川明男

1994年9月25日、神奈川県三浦市小網代において東京動物園協会昆虫愛好会の主催でクモの観察会が行なわれた。このとき、チュウガタシロカネグモ *Leucauge blanda* を採集したので報告する。当日のコースは、バス停荒井館前から小網代漁港に降りて白髭神社から干潟までという短いものであつたが、バス停から漁港に降りる坂道で1頭を視認、干潟にいたる直前で1頭、干潟で2頭それぞれ雌成体を採集した。チュウガタシロカネグモは三浦市新記録となる。以前にも報告したように神奈川県東部ではチュウガタシロカネグモの記録はたいへん少ない。今まで私が自分で標本を確認したものは、横浜市、鎌倉市、だけであった。

北海道にもシノビグモがいる

谷川明男

最近、北海道で採集された標本の同定依頼を受けたのだが、その中にシノビグモと思われる幼体の標本を発見した。標本は幼体なのではつきりとシノビグモ *Sinobius orientalis* (YAGINUMA, 1758) そのものと同定することはできなかつたが、手元の長野県産のシノビグモの標本との照合では、外部形態にこれといった相違点は見られなかつた。標本のデータは次のとおりである。採集地：北海道札幌市南区定山渓さっぽろ湖付近、採集日：29-VII-1994、採集者不明。定山渓を訪れる機会のある方はぜひ注意して見てきていただきたい。また、北海道にまで分布しているとなれば、関東から東北地方についても生息している可能性が高い。今後、各地での注意深い観察が望まれる。

金沢市兼六園における地中性のクモ類の分布

畠守有紀

第26回日本蜘蛛学会大会が金沢市で開かれたその前日の1994年8月19日、大会世話人の徳本洋氏に紹介して頂いた南多喜男氏（兼六園管理事務所技師）の案内で、金、南宮両氏をはじめとする韓

DRAGLINES

国のクモ研究者4名と、梅林、木村、笹岡、貞元、畠守の合計9名で金沢市兼六園を訪れた。ここは金沢市街地中央部にある公園で、旧藩主前田家によって造られた大規模な日本式庭園である。そこで地中性のクモ数種を観察したので報告する。

確認できた種は以下の4種である。キシノウエトタテグモ *Latouchia typica*、キノボリトタテグモ *Ummidia fragaria*、ジグモ *Atypus karschi*、ワスレナグモ *Calommata signata*。

まず津田玄蕃邸（兼六園管理事務所）の裏ではキシノウエトタテグモ（以下キシノウエ）から発生したクモタケ *Nomuraea atypicola* を確認できた。ここは1993年に日本海側でのキシノウエとクモタケの分布の北限として報告したものである（1993、新海・畠守）。非常に固い土壌で、クモを採集するために南氏がスコップに足をかけて掘ったほどであった。このように固い土壌に営巣するキシノウエは関西の四天王寺などで見られるが、キシノウエの生息地としてはややまれと思われる。キシノウエはその他、三芳庵の裏や隨身坂の脇の崖でも見つかった。また、兼六園から1kmへだたっており、大会会場でもあつた石川県青年会館の近くでもキシノウエ（♀・♂各1個体）を採集した。この青年会館近くのキシノウエは道路ぎわの湿つた崖面に営巣していた。どうも金沢市内でキシノウエは比較的広範囲に分布していると思われる。

ワスレナグモは兼六園管理事務所横にある梅林の近くで、笹岡氏と置き石の回りを見ていた時に偶然巣を見つけた。これは同行の梅林氏に確認してもらつただけで採集はしなかつた。また園内では意外とジグモが見つかりにくく、黄門橋の近くや金沢神社内でやつて発見した。やはり毎日掃き清められているためであろう。キノボリトタテグモは隨身坂の崖でキシノウエトタテグモと混在していることを確認した。採集したキノボリトタテグモはかなり小さい幼体ではあったが下顎、下唇の突起で判断した。これは今までの日本海側の北限（福井県若狭地方）を越える記録となつた。

しかし天下の名勝兼六園に行ったのに、各氏の視線が観光客らしくなかつたように思うのは気のせいだろうか？

最後になつたが案内して頂いた南多喜男氏、また南氏を紹介して頂き本文の校閲もして頂いた徳本洋氏にお礼申し上げる。

スジブトハシリグモの魚の捕食行動を撮影

赤 羽 尚 夫

1993年5月23日に神奈川県厚木市七沢の県立自然保護センター野外施設で、水面から約20cm上のコウホネの葉の上で、モツゴの幼魚（33mm）を捕食しているスジブトハシリグモの♀を目撃し、撮影することができた。

これまでにスジブトハシリグモの魚の捕食の報告記録は見当たらず、同類のイオウイロハシリグモの金魚の捕食は報告されている（八木沼、1969）。また、外国ではイオウイロハシリグモが小さな魚を水面近くにおびきよせて捕るものも知られている（新海、1987）。

DRAGLINES

なお、スジブトハシリグモのモツゴの捕食を確認した付近で、翌年の5月15日に同種が水面から32cm上のコウホネの葉の上で、自分の体長の2倍程のオタマジャクシを捕食している写真も撮影したので付記する。

最後に写真による種の同定や多くの教示をいただいた新海栄一氏、池田博明氏に感謝申し上げる。



モツゴを捕食するスジブトハシリグモ

神奈川県厚木市でムツトゲイセキグモの生息を確認

赤 羽 尚 夫

1994年8月26日神奈川県厚木市七沢の自然保護センターの野外施設の桑の木の葉裏に、突起のある卵のう3個と変った形の成体を見つけ、ムツトゲイセキグモらしいと推定し、池田博明氏にお願いしムツトゲイセキグモ *Ordgarius sexsponosus* と同定していただいた。

生息していた桑の木は、谷戸に作られた池の縁にあり、樹高は4mで、卵のうと成体が確認されたのは池に張り出した枝（水面から2.2m地上1.6m）の葉裏で、外部からは見つかりにくい所であった。

この種は捕虫のため投げ縄行動をする（新海栄一、1982. アニマ）ことが知られているため、同年9月8日18時50分から20時30分まで同センター職員と共に観察を続けたが、投げ縄行動を確認することはできなかつた。観察の際投げ縄行動を誘発させるための「カの羽音」などを試してみればよかつたかと、今になって反省している。

同年9月11日3個の卵のうを残し、成体は姿を消した。外敵に食べられた、卵のうを守る役目を終えて他へ移動した、人間に捕えられたなどの理由が考えられるが不明である。

神奈川県内のムツトゲイセキグモの記録は1964年相模原市（竹中英雄氏）で確認されて以来30年ぶりの発見で超稀産種である。

当センターの野外施設では、1983年（新海栄一・熊田憲一）1993年（新海栄一他3名）の調査でムツトゲイセキグモは発見されておらず、生息は近年からと推定される。

—DRAGLINES—



ムツトゲイセキグモとその卵のう

1995年3月6日現在、卵のう3個は確実に桑の木枝に糸で結ばれ吊り下つており、4月の出のうを期待している。

最後に新海栄一氏、池田博明氏にこの件につきいろいろと教示いただき厚くお礼申し上げる。

東京蜘蛛談話会 1992年度合宿報告

伊豆半島松崎町雲見のクモ

新海 明・高橋祐子

1992年度の東京蜘蛛談話会の合宿は、7月25日（土）から27日（月）にかけて静岡県賀茂郡松崎町雲見周辺で26名の参加者を迎えて行われた。

伊豆半島での合宿は1976年に天城・石廊崎、1982年に天城山と過去2度行われており、今回の雲見合宿は当談話会としては10年ぶり3度目となる。松崎町雲見は西伊豆と南伊豆の境にあたる大変に自然の豊かな地域である。調査は雲見の烏帽子山と太田川の上流のマーガレットライン沿いの林道および南伊豆町の蛇石周辺のミカン畑で行った（図1）。また、一部有志により南伊豆町においても調査した。その結果、伊豆半島新記録のスズミグモを初めとしてトリノフンダマシ類やコガネグモ類などが豊富に採集できた。

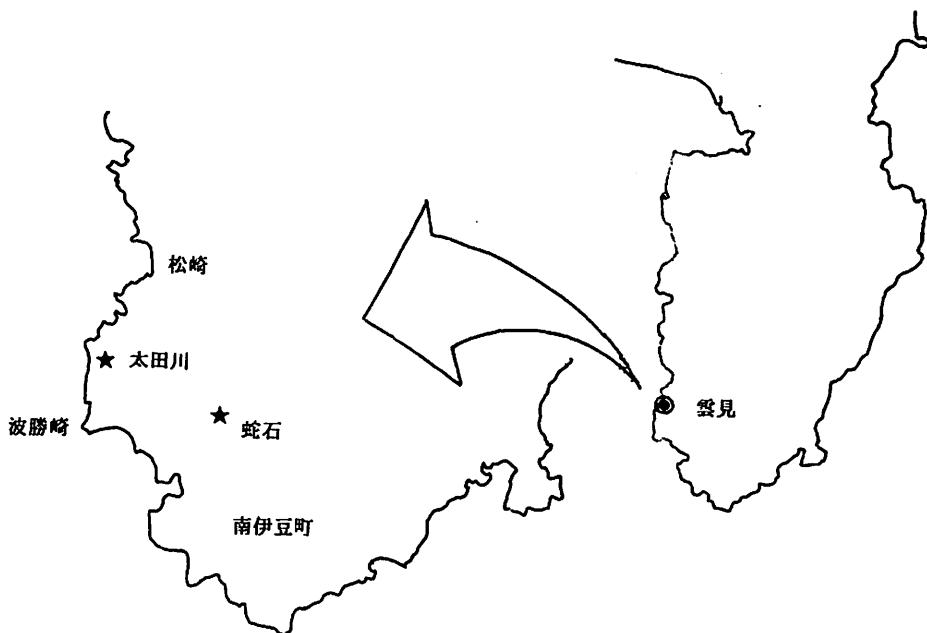


図1. 調査地概念図。星印は主な採集地を示す。

<日 程>

7月25日（土）晴れ。夕刻までに集合。夕食後 20:00から 22:00まで太田川上流の林道沿いで夜間観察を実施。佐藤邦人君がムシバミコガネグモを採集。

26日（日）晴れ、猛暑。朝方、宿舎「吉右衛門」周辺で各自調査。南伊豆町の蛇石のミカン畑周辺で調査。スズミグモ・トリノフンダマシ類採集。午後はスギの造林地内の渓流沿いで調査。ヨリメグモ・ナルコグモなどを採集観察。その後、一旦宿舎にもどり休憩後に雲見浜周辺にてハンケツオスナキグモなどを採集観察した。夜間調査は夕食後20:00～22:00まで鳥帽子山と雲見浜にて実施した。

27日（月）晴れ。午前中、1日に夜間調査した太田川上流の林道沿いにて採集観察。宿舎にもどり昼食後に解散。

<参加者>

秋山延生*, 阿部代始子, 伊藤浩見*, 稲葉茂代, 小澤実樹, 笠原喜久雄, 加藤輝代子, 加藤倫之*, 加藤むつみ, 木村知之, 熊田憲一, 佐藤邦人, 佐藤尚子, 佐藤幸子, 貢元己良, 新海明, 鈴木成生, 谷川明男, 高橋登, 高橋祐子, 長井芳夫 中島晴子, 萩本房枝, 蓮沼克巳, 番守有紀, 平松毅久（以上、26名；*印は会員外）

<目 錄>

この目録は主に熊田憲一と稻葉茂代・小澤實樹が採集して熊田が同定したものに、新海明が記録したものと加えたものである。

記号の説明

M (雄成体), F (雌成体), m (雄幼体), f (雌幼体), y (性別不明幼体), e (卵のう),
雲: 雲見, 蛇: 蛇石

1.Uloboridae ウズグモ科

- | | | |
|--|----------|--------------|
| 1. <i>Uloborus sybotoides</i> Bös. et STR. | カタハリウズグモ | 雲 F, 蛇 F |
| 2. <i>U. varians</i> Bös. et STR. | ウズグモ | 雲 FMf, 蛇 Fye |

2.Segestriidae エンマグモ科

- | | | |
|---------------------------------------|--------|-----|
| 3. <i>Ariadna insulicola</i> YAGINUMA | シマミヤグモ | 雲 F |
|---------------------------------------|--------|-----|

3.Pholcidae ユウレイグモ科

- | | | |
|---|----------|--------|
| 4. <i>Pholcus crypticolens</i> Bös. et STR. | ユウレイグモ | 雲 FMfm |
| 5. <i>P. phakangiooides</i> (FUSSLIN) | イエユウレイグモ | 雲 FMf |

4.Oonopidae タマゴグモ科

6. *Ischnothyreus narutomii* (NAKATSUDI) ナルトミダニグモ 雲 F

5.Theridiidae ヒメグモ科

- | | | |
|---|-------------|---------------|
| 7. <i>Achaearanea angulithorax</i> (Bös.et STR.) | ツリガネヒメグモ | 雲 FMf, 蛇 F |
| 8. <i>A. culicivora</i> (Bös.et STR.) | カグヤヒメグモ | 雲 FMfy, 蛇 FMy |
| 9. <i>A. japonica</i> (Bös.et STR.) | ヒメグモ | 雲 Mfm, 蛇 FMfm |
| 10. <i>A. tepidariorum</i> (C.KOCH) | オオヒメグモ | 雲 FMf |
| 11. <i>A. oculiprominentis</i> (Bös.et STR.) | キヨヒメグモ | 蛇 M |
| 12. <i>Anelosimus crassipes</i> (Bös.et STR.) | アシブトヒメグモ | 雲 FMfm, 蛇 Ff |
| 13. <i>Argyrodes bonadea</i> (KARSCH) | シロカネイソウロウグモ | 雲 ye, 蛇 Fy |
| 14. <i>A. cylindratus</i> THORELL | トビジロイソウロウグモ | 雲 F, 蛇 FM |
| 15. <i>A. cylindrogaster</i> (SIMON) | オナガグモ | 蛇 FM |
| 16. <i>A. fissifrons</i> O.P.-CAMBRIDGE | チリイソウロウグモ | 雲 FMf, 蛇 FM |
| 17. <i>A. fur</i> Bös.et STR. | フタオイソウロウグモ | 雲 My, 蛇 y |
| 18. <i>A. miniaceus</i> (DOLESCHALL) | アカイソウロウグモ | 雲 FMfm, 蛇 FMM |
| 19. <i>A. nipponicus</i> KUMADA | ツノナガイソウロウグモ | 蛇 e |
| 20. <i>A. saganus</i> (D.N.ET STR.) | ヤリグモ | 雲 F, 蛇 F |
| 21. <i>Chrysso rapulum</i> (YAGINUMA) | ギボシヒメグモ | 雲 M, 蛇 F |
| 22. <i>C. venusta</i> (YAGINUMA) | コガネヒメグモ | 蛇 Fy |
| 23. <i>Dipoena flavomarginata</i> Bös.et STR. | キベリミジングモ | 雲 m |
| 24. <i>D. mustelina</i> (SIMON) | カニミジングモ | 雲 FMfm |
| 25. <i>D. punctisparsa</i> YAGINUMA | シモフリミジングモ | 雲 Mf, 蛇 f |
| 26. <i>Episinus affinis</i> Bös.et STR. | ヒシガタグモ | 雲 f |
| 27. <i>Enoplognatha transversisoveata</i> (Bös.et STR.) | カレハヒメグモ | 雲 y |
| 28. <i>Steatoda cavernicola</i> (Bös.et STR.) | ハンゲツオスナキグモ | 雲 Fy |
| 29. <i>Theridion sterminotatum</i> Bös.et STR. | ムナボシヒメグモ | 雲 FMfm |
| 30. <i>T. lyricum</i> WALCKENAER | シモフリヒメグモ | 雲 M |
| 31. <i>T. subpallens</i> Bös.et STR. | ハイイロヒメグモ | 蛇 f |

6.Nesticidae ホラヒメグモ科

32. *Nesticus brevipes* YAGINUMA コホラヒメグモ 蛇 FM

7.Linyphiidae サラグモ科

- | | | |
|------------------------------------|-----------|------|
| 33. <i>Asperthorax communis</i> OI | ザラアカムネグモ | 蛇 F |
| 34. <i>Doenitzius peniculus</i> OI | デーニツツサラグモ | 雲 fm |

35. <i>Hylaphantes graminicola</i> (SUNDEVALL)	クロナンキングモ	蛇 F
36. <i>Linyphia oidedicata</i> (HELDINGEN)	ヘリジロサラグモ	雲 FMm, 蛇 F
37. <i>L. nigripectoris</i> (OI)	ムネグロサラグモ	雲 F, 蛇 Ffm
38. <i>L. yunohamensis</i> Bös.et STR.	ユノハマサラグモ	蛇 y
39. <i>Ummeliata bicurvatus</i> (Bös.et STR.)	トウキヨウアカムネグモ	雲 FMy
8.Mimetidae センショウグモ科		
40. <i>Ero japonica</i> Bös.et STR.	センショウグモ	雲 FMf
9.Theridiosomatidae カラカラグモ科		
41. <i>Ogulnius pullus</i> Bös.et STR.	ヤマジグモ	雲 Fy
42. <i>Theridiosoma epeiroides</i> Bös.et STR.	カラカラグモ	蛇 F
43. <i>Wendilgarda</i> sp.	ナルコグモ	蛇 Ff
10.Anapidae ヨリメグモ科		
44. <i>Conoculus lyugadinus</i>	ヨリメグモ	蛇 Ff
11.Mysmenidae コツブグモ科		
45. <i>Mysmenella jobi</i> (KRAUS)	ナンブコツブグモ	雲 f
12.Araneidae コガネグモ科		
46. <i>Acusilas coccineus</i> SIMON	ハツリグモ	雲 Fy
47. <i>Araneus pentagrammicus</i> (KARSCH)	アオオニグモ	雲 y, 蛇 y
48. <i>A. ejusmodi</i> Bös.et STR.	ヌサオニグモ	蛇 F
49. <i>A. pseudocentroides</i> Bös.et STR.	トガリオニグモ	蛇 Ffy
50. <i>A. punctigera</i> (DOLESCHALL)	コゲチャオニグモ	雲 fy, 蛇 f
51. <i>A. variegatus</i> YAGINUMA	ニシキオニグモ	雲 f
52. <i>A. ventricosus</i> (L.KOCH)	オニグモ	雲 fy
53. <i>A. viperifer</i> SCHENKEL	カラオニグモ	雲 f
54. <i>A. viridiventris</i> YAGINUMA	ハラビロミドリオニグモ	蛇 f
55. <i>Argiope aetherea</i> (WALCKENAER)	ムシバミコガネグモ	雲 F
56. <i>A. bruennichii</i> (SCOPOLI)	ナガコガネグモ	蛇 m
57. <i>A. minuta</i> KARSCH	コガタコガネグモ	雲 fm, 蛇 fm
58. <i>Chorizopes nipponicus</i> YAGINUMA	ヤマトカナエグモ	蛇 F
59. <i>Cyclosa japonica</i> Bös.et STR.	ヤマトゴミグモ	雲 m, 蛇 F
60. <i>C. argenteoalba</i> Bös.et STR.	ギンメツキゴミグモ	雲 Ffm, 蛇 m
61. <i>C. laticauda</i> Bös.et STR.	キジロゴミグモ	雲 F

62. <i>C. octotuberculata</i> KARSCH	ゴミグモ	雲 Ffy, 蛇 F
63. <i>C. sedeculata</i> KARSCH	ヨツデゴミグモ	蛇 F
64. <i>C. vallata</i> (KEYSERLING)	マルゴミグモ	雲 f
65. <i>Cyrtarachne bufo</i> (Bös. et STR.)	トリノフンダマシ	蛇 f
66. <i>C. inaequalis</i> THORELL	オオトリノフンダマシ	蛇 FMfy
67. <i>C. yunoharuensis</i> STRAND	アカイロトリノフンダマシ	蛇 FM
68. <i>Cyrtophora moluccensis</i> (DOLESCHALL)	スズミグモ	蛇 Ff
69. <i>Larinia argiopiformis</i> Bös. et STR.	コガネグモダマシ	雲 Ff
70. <i>Meta reticuloides</i> YAGINUMA	ヤマジドヨウグモ	蛇 m
71. <i>Neoscona mellotteei</i> (SIMON)	ワキグロサツマノミダマシ	雲 fm, 蛇 fm
72. <i>N. scylloides</i> (Bös. et STR.)	サツマノミダマシ	雲 F, 蛇 Mf
73. <i>N. scylla</i> (KARSCH)	ヤマシロオニグモ	雲 FM
74. <i>N. subpullata</i> (Bös. et STR.)	ヘリジロオニグモ	雲 fy
75. <i>Nephila clavata</i> L.KOCH	ジョロウグモ	雲 y, 蛇 y
76. <i>Yaginumia sia</i> (STRAND)	ズグロオニグモ	雲 FM
77. <i>Zilla sachalinensis</i> (S.SAITO)	カラフトオニグモ	雲 y

13.Tetragnathidae アシナガグモ科

78. <i>Leucauge blanda</i> (L.KOCH)	チュウガタシロカネグモ	雲 FMf, 蛇 FMy
79. <i>L. magnifica</i> YAGINUMA	オオシロカネグモ	蛇 FMy
80. <i>Tetragnatha maxillosa</i> THORELL	ヤサガタアシナガグモ	雲 fm
81. <i>T. praedonia</i> L.KOCH	アシナガグモ	雲 FMfmy, 蛇 fm
82. <i>T. yesoensis</i> S.SAITO	エゾアシナガグモ	蛇 F
83. <i>T. squamata</i> KARSCH	ウロコアシナガグモ	蛇 Fy
84. <i>T. subgemmea</i> Bös. et STR.	キララシロカネグモ	蛇 F

14.Urocteidae ヒラタグモ科

85. <i>Uroctea compactilis</i> L.KOCH	ヒラタグモ	雲 Ff
---------------------------------------	-------	------

15.Agelenidae タナグモ科

86. <i>Agelena limbata</i> THORELL	クサグモ	雲 Ff, 蛇 f
87. <i>A. opulenta</i> L.KOCH	コクサグモ	雲 f, 蛇 f
88. <i>Coelotes corasides</i> (Bös. et STR.)	ヤマヤチグモ	雲 y

16.Hahniidae ハタケグモ科

89. <i>Hahnia corticicola</i> Bös. et STR.	ハタケグモ	雲 M
--	-------	-----

	17.Pisauridae キシダグモ科	
90. <i>Dolomedes sulfureus</i> L.KOCH	イオウイロハシリグモ	雲 M,蛇 fy
91. <i>Pisaura lama</i> Bös.et STR.	アズマキシダグモ	蛇 F
	18.Lycosidae コモリグモ科	
92. <i>Pardosa yamanoi</i> TANAKA ET SUWA	テジロハリゲコモリグモ	蛇 M
93. <i>Pirata procurvus</i> (Bös.et STR.)	チビコモリグモ	雲 FM,蛇 Ffe
94. <i>P. piratoides</i> (Bös.et STR.)	イモコモリグモ	蛇 F
95. <i>Tricca japonica</i> SIMON	ヒノマルコモリグモ	雲 Mf
	19.Oxyopeidae ササグモ科	
96. <i>Oxyopes sertatus</i> L.KOCH	ササグモ	蛇 FMe
	20.Clubionidae フクログモ科	
97. <i>Chiracanthium lascivum</i> KARSCH	ヤマトコマチグモ	雲 Fy,蛇 Fye
98. <i>Clubiona kurilensis</i> Bös.et STR.	ヒメフクログモ	雲 M,蛇 F
99. <i>C. jucunda</i> (KARSCH)	ヤハズフクログモ	蛇 M
100. <i>C. vigil</i> KARSCH	ムナアカフクログモ	雲 F,蛇 FMy
101. <i>C. yaginumai</i> HAYASHI	ヤギヌマフクログモ	蛇 F
102. <i>Itatsina praticola</i> (Bös.et STR.)	イタチグモ	雲 FMy
103. <i>Phrurolithus coreanus</i> PAIK	キレオビウラシマグモ	雲 F
104. <i>P. pennatus</i> YAGINUMA	ヤバネウラシマグモ	雲 F
	21.Ctenidae シボグモ科	
105. <i>Anahita fauna</i> KARSCH	シボグモ	雲 f,蛇 fy
	22.Heteropodidae アシダカグモ科	
106. <i>Heteropoda forcipata</i> (KARSCH)	コアシダカグモ	雲 FM
107. <i>H. venatoria</i> (LINNAEUS)	アシダカグモ	雲 f
	23.Thomisidae カニグモ科	
108. <i>Boliscus tuberculatus</i> (SIMON)	イボカニグモ	蛇 f
109. <i>Diaeа subdola</i> O.P.-CAMBRIDGE	コハナグモ	蛇 y
110. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (FABRICIUS)	ハナグモ	雲 Ffy, 雲 f
111. <i>Oxytate striatipes</i> L.KOCH	ワカバグモ	雲 f,蛇 y
112. <i>Tmarus rimosus</i> PAIK	セマルトラフカニグモ	雲 FMy
113. <i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ	雲 F

24. Philodromidae エビグモ科

114. <i>Philodromus subaureolus</i> BöS. et STR.	アサヒエビグモ	雲 Fy, 蛇 F
115. <i>P. spinitarsis</i> SIMON	キハダエビグモ	雲 F
116. <i>Tibellus tenellus</i> (L.KOCH)	シャコグモ	雲 y

25. Salticidae ハエトリグモ科

117. <i>Aelurillus festivus</i> L.KOCH	ヤマジハエトリ	蛇 f
118. <i>Carthotus xanthogramma</i> (LATREILLE)	ネコハエトリ	蛇 y
119. <i>Evarcha albaria</i> (L.KOCH)	マミジロハエトリ	雲 FMf
120. <i>Hasarius adansoni</i> (AUDOUIN)	アダンソンハエトリ	雲 FMf
121. <i>Laufelia aenea</i> SIMON	エキスハエトリ	蛇 f
122. <i>Myrmarachne formicaria</i> (DEGEER)	タイリクアリグモ	雲 M
123. <i>M. japonica</i> (KARSCH)	アリグモ	蛇 F
124. <i>Phintella linea</i> (KARSCH)	メガネアサヒハエトリ	雲 f
125. <i>Plexippoides doenitzi</i> (KARSCH)	デニニツツハエトリ	雲 f, 蛇 F
126. <i>Plexippus paykulli</i> (AUDOUIN)	チャスジハエトリ	雲 F
127. <i>Pseudicius himeshimensis</i> (BöS. et STR.)	イソハエトリ	雲 FMy
128. <i>Rhene atrata</i> (KARSCH)	カラスハエトリ	蛇 FMfmy
129. <i>R. sp.</i>	ヒメカラスハエトリ	雲 F
130. <i>Synagelides agoriformis</i> STRAND	アメイロハエトリ	雲 F
131. <i>Yaginumanis sexdentatus</i> (YAGINUMA)	ムツバハエトリ	蛇 m

雲見の合宿では、以上のように25科 131種類のクモが確認できた。注目すべき種類としては伊豆半島新記録のスズミグモやムシバミコガネグモなどがあげられる。

なお、伊豆半島のクモ類相については東京蜘蛛談話会1976年の合宿報告（ここには、伊豆半島のクモに関する文献の一覧が掲載されている）によって24科 132種が（新海、1977）、同じく1982年の合宿では26科 128種が記録されているので（熊田・加藤、1987）あわせて参照していただきたい。本稿をまとめるにあたり、谷川明男氏には目録の作成で大変にお世話になった。ここに御礼申し上げる。

＜合宿点描＞（東京蜘蛛談話会通信 No.76 (1992.10.10.)から引用）

初日

長野県白馬、福島県裏磐梯とここ2年間は北の地方での合宿が続いたので、今年は是非とも南の見栄えのするクモを探ろうということで、伊豆半島の先端の松崎町雲見で7月25日から27日にかけて談話会恒例の合宿が行われた。参加者は合計27名とまずまずであった。初日には阿部代始子さん

と加藤むつみさんが最終のバスに乗り遅れるというアクシデントがあつたが、夕食後の夜間観察から合宿がスタートした。この日は雲見の奥の山間部へ出かけた。私の狙いは南方系の珍種ユアギグモとクロマルイソウログモの発見であつた。暫く營めるように路傍の崖でユアギグモを探すが発見できない。ユアギグモが多数いる千葉県の清澄山に比べると少々乾きすぎているようであつた。ダメかなと諦めかけていたとたんに小さなシート状の円網が目に入った。思わず「あつた、あつた」と周囲の人を呼び集めてしまった。他の人に見せている間にさらにいないかと探すとまたあつた。ところがその網の中心にはなんと「隠れ帯」があるではないか。先程のクモも変だとは思ったのだ。なぜなら、千葉のユアギグモは黒く丸いのだが、ここのは白くて長いクモだったからである。「隠れ帯」が付いていたとたんにこのクモの正体に気がついた——ウズグモの幼体の網である。この網は私がかつて報告したものなのだ。初日からとんだ大恥をかいてしまった。この夜の最大の成果はムシバミコガネグモと思われるクモの発見であろう。合宿に初めて参加した高校3年生の佐藤邦人くんが採つたものである。

二日目（午前）

夏の伊豆半島なのだから暑いのはあたりまえなのだが、早朝からクーラーを入れるほどの暑さにはまいった。私は♂young5頭が集まる部屋に寝ていたが、長井さん鈴木さん笠原さんらは朝早くから付近の山に採集に出かけられていた。その若さ元気さにはビックリであった。その部屋でいつも最後まで布団の中で惰眠をむさぼっていたのは私ともう一人のyoung♂である小澤さんであつた（あつ、この日は私よりも早かつたですね。ゴメンナサイ）。

朝食後に今日の採集地である蛇石方面に向かう。私は伊藤さんの車で畠守さんを迎えて小浦のバス停へ。畠守有紀さんは長野県の菅平での大学実習の終了後に現地から夜行列車を乗り継いで駆け付けて下さったのだ。これで参加者全員が揃つたわけである。蛇石の採集地に到着するとものすごい暑さだった。しかし、ミカン畑のなかで早くもトリノフンダマシ各種や伊豆半島新記録のスズミグモなどが採られていた。私も早速、畠守さん高橋祐子さんらの若いご婦人を山に連れ込んで（アブナイ表現だな）…採集観察を始めた。暫く歩くとすぐにスズミグモの網を見付けたが肝心のクモがない。誰かがすでに採集してしまったようだ。トリノフンダマシ類も一向に見つからない。考えてみればあたりまえであつた。熊田・谷川・高橋登・貞元・蓮沼といった採集の達人たちの後を辿って歩いてもめぼしいクモなどいるわけがないのだ。仕方なく「これがヒメグモ、あれがチリイソウロウグモ」などと佐藤・木村知之さんらを加えて、クモの初心者向けの勉強会を始めた。萩本房枝さんと貞元さんにも講師になつていただいた。高橋祐子さんは今年からアセスの会社に入られたので植物も知りたいとのことで、植物についての私の貧弱な知識を総動員して草木も観察に加えた。畠守さんは専門のキノコ類も採集していた。

盛夏の日差しは容赦なく頭上からふりそそぎ、正午を前に参加者一同ダウン寸前だった。そのとき登場したのが伊藤さんが車のクーラーに隠し持っていた冷えた麦茶であつた。これを天の恵だ。木陰で喉を潤してからトイレ休憩を兼ねてマーガレットラインへ戻る。立ち寄つたドライブインには「皿投げ」なるコーナーがあり加藤輝子さんのお子さんの倫之くんを連れてこれに興じた。風にうまく乗せると結構100mくらいとばすことができた。

二日目（午後）

皿投げのドライブインで今日帰る方々と別れ、午後は再び蛇石へと戻り、今度は沢沿いの日影で採集することにした。溪流上ではナルコグモの鳴子網を観察したり、ヨリメグモが採集された。また、ナルコグモ・カラカラグモ・ヤマジグモなどの奇妙な卵のうが観察できたのは収穫であった。午後3時くらいまでここで調査をして、採集地を他に移すことにした。しかし、炎天下での続く調査で参加者はかなり疲れていたので最後の調査地への移動は急遽取り止めて、宿舎に戻り夜間調査に備えて休養をとることにする。

雲見の夕陽はことのほか有名なのだそうだ。ここは山から陽が昇り、海へと陽が沈む西伊豆の景勝地である。せっかく海へ来たのだから海岸まで行こうということになり、皆で浜へ出た。浜は海水浴客で混んでいたが湘南や東伊豆の比ではない。平松毅久さんなど泳ぎ始めた人もいたようだ。一同は雲見のくじら館へ入り、鯨の骨格標本などを見学したあとで、当地の名物の心太に舌鼓をうつ。磯の香りの高いなかなかのものであった。その後、岬へと足を伸ばす。…と早速、海岸の崖へと目が行く。習性なのだろう、採集観察が始まってしまった。稻葉茂代さん・熊田さん・鈴木さんらがハンゲツオスナキグモをみつけていた。私は皆と離れて一人で岬へと向かつた。陽はまだ高く海へ沈むまでには相当な時間がかかりそうである。でも、とにかく岩かけの向こうがわにある海と夕陽が見たかった（水着の女性ではないですぞ）。そばで小澤さんがスケッチを始めた。確かに西伊豆の海岸線は鋭く高く崖を刻み見事である。濃い鉛筆がせわしなく動き瞬く間に白い画帳にそれらがはめこまれていった。陽は高くまだ落ちそうもなかつたが、水平線のかなたの雲の間に見え隠れつしながら夕陽になろうとしていた。突然、高橋さんがヤイトバナをもつてきてくれた。ヤイトバナ、別名ヘクソカズラ。今日の観察会で話したものだ。名前が名前だが植物自身の知ったことではない。路傍に咲くヘクソカズラの美しさに気付く人がどれほどいるのだろうか。植物画を描く私の友人は竹囲いにからみついた見事なヘクソカズラを描いた。路傍に咲くありふれた雑草の美しさにも気がつきたいものだ。名だたる景勝地や珍稀な花ばかりが大切なのではなかろう。自然保護の原点もここにあるようにおもうのだが…（話がそれた）。佐藤邦人くんはここでコケオニグモに似たクモをとり夕食時に皆の判断を仰いだが、見事に空振りに終わってしまいガッカリしていた。

夕食後の夜間観察は宿舎のそばにある鳥帽子山の神社へ向かつた。急な階段に沿ってライトの放列が進む。ここでもユアギグモはみつかなかつた。ナンブコツブグモさえ1頭みつけただけだった。神社の壁にアシダカグモがいたのを熊田さんらがみつけ、そばにあつた簾ではたき落として採集していた。ここはあまりたいした成果もあがらず、今度は海岸へ出ることにした。夕方の採集でハンゲツオスナキグモがとれていたので是非それをもう一度見たいという要望が強かつたようだ。岩場ではクモを探すグループと星を眺めるグループがあつたようだ。わずかに夏の大三角と北斗七星がみえただけだった。

宿舎に帰つてからの恒例のタコ部屋が、一同かなり疲れているにもかかわらず盛り上つたのは言うまでもない。

三日目

我が部屋の同宿者は今日も朝早くから付近の採集にでかけたようだ。7時半ころに起きると、皆さんすでに採集品の整理をされており、昨日の蛇石の溪流で観察したナルコグモとヨリメグモの網

の構造の話になってしまった。半分寝ぼけていた頭も急にしゃきっとせざるを得なくなつた。いや、その熱心なこと。年齢だけ若いものもしっかりせねば。

朝食後、雪見合宿最後調査地は初日に夜間採集した場所だった。夜見る感じと昼間のそれとはずいぶんと違うものである。車を止めた付近で数頭のシロオビトリノフンダマシが見つかった。私達は相変らず長井さん阿部さん中島さんといった植物に詳しい方々とクモを見たり植物を見たりで楽しかった。佐藤さん親子がタケの先にいた美しいヌサオニグモを見つけた。稲葉さんたちと「なるほど幣（ぬさ）になっているね」などと感心しながら見いつつもまた、長井さんが初日の晩に見せてくださったハゼの木の実（サツマノミ）がたくさん見られ、これもクモとの比較ばなしに花が咲いた。集合時間になつても観察採集が終わらず30分ほど延長するほど熱心な調査が続いた。また、帰りかけにはベッコウバチがコアシダカグモを狩つて巣に迎撃するところが観察されたのも収穫だった。そして宿舎にもどつての最後の昼食をとり、一部の人たちは最後の温泉につかり、解散となつた。

引用文献

熊田憲一・加藤卯代子,1987.伊豆半島天城湯ヶ島市山のクモ. *Kishidaia*,(55):10-16.

新海栄一,1977.伊豆半島の真正クモ類. *Kishidaia*,(42):44-49.

東京蜘蛛談話会 1993年度（合同）合宿報告

紀伊半島熊野市周辺のクモ

新海 明

1993年度の東京蜘蛛談話会の合宿は初めての試みとして関西クモ研究会・中部蜘蛛懇談会・三重クモ談話会・和歌山クモの会との合同で、7月24日から26日にかけて三重県熊野市周辺で36名の参加者を迎えて行われた。

紀伊半島での合宿は東京蜘蛛談話会としては初めてであるが、三重クモ談話会のフィールドであり熊野市周辺では1990年8月8日～9日にかけての合宿で89種類（貝発,1990），1991年8月19日～20日の合宿では65種類のクモ類が報告されている（貝発,1991）。また、当談話会の会員でもある塙崎哲哉氏はこの地域でのクモ類を長年に渡り調査されている。

熊野市は三重県の南部に位置し温暖な場所であり、多くの南方系の珍種が採集できるのではと期待されたが、予想通りムツトゲイセキグモやキヌアミグモ、ムシバミコガネグモ、ヒシガタヒメグモなどの珍しいクモを採集することができた。おもな採集地点を図1に示す。

なお、合同合宿の実施にあたり現地の宿舎の手配や案内では貝発憲治氏と塙崎哲哉氏に、各クモの会との連絡や車の手配などでは須賀瑛文氏と吉田真氏・東条清氏にお世話をなった。そして、金野晋氏には下見の段階からさまざまなお手伝いをお願いした。ここに厚く御礼申し上げる。

<日 程>

- 7月24日（土）雨（台風4号の接近のため）、夕刻までに集合。夕食後20:00から21:30頃まで熊野市駅の裏山にある簡易保険センターの宿泊所の裏手のミカン畑周辺にて夜間観察を実施。熊田氏がムツトゲイセキグモを採集。キヌアミグモ・ユアギグモの一種などを観察採集した。風雨強く途中で止めて宿舎に戻る。
- 25日（日）台風一過で晴れたが後、夕刻より雨。午前中は熊野市大馬神社周辺で調査。ミカン畑にて貞元氏がムツトゲイセキグモを採集。参加者一同で観察をした。ゲホウグモも採集された。また、吉田氏はメガネドヨウグモの一種を平松氏はカラカラグモの一種を採集したが、いずれも新種候補であることが判明。昼食後、海岸沿いの花の窟（いわや）神社にて調査その後、一旦宿舎にもどり休憩組と採集組に別れて行動。採集組は熊野市井戸町周辺の山沿いにて採集。夜間調査は夕食後前日と同様に雨の中で20:00～22:00まで熊野市の五郷町付近の清水谷にて実施した。

26日（月）くもり。午前中、1日目に夜間調査した簡保センターの裏沿いにて採集観察。東条氏がアズキ色のトリノフンダマシを採集、参加者の多くはシロオビではないかということだったが不明。昼食後宿舎にもどり解散。

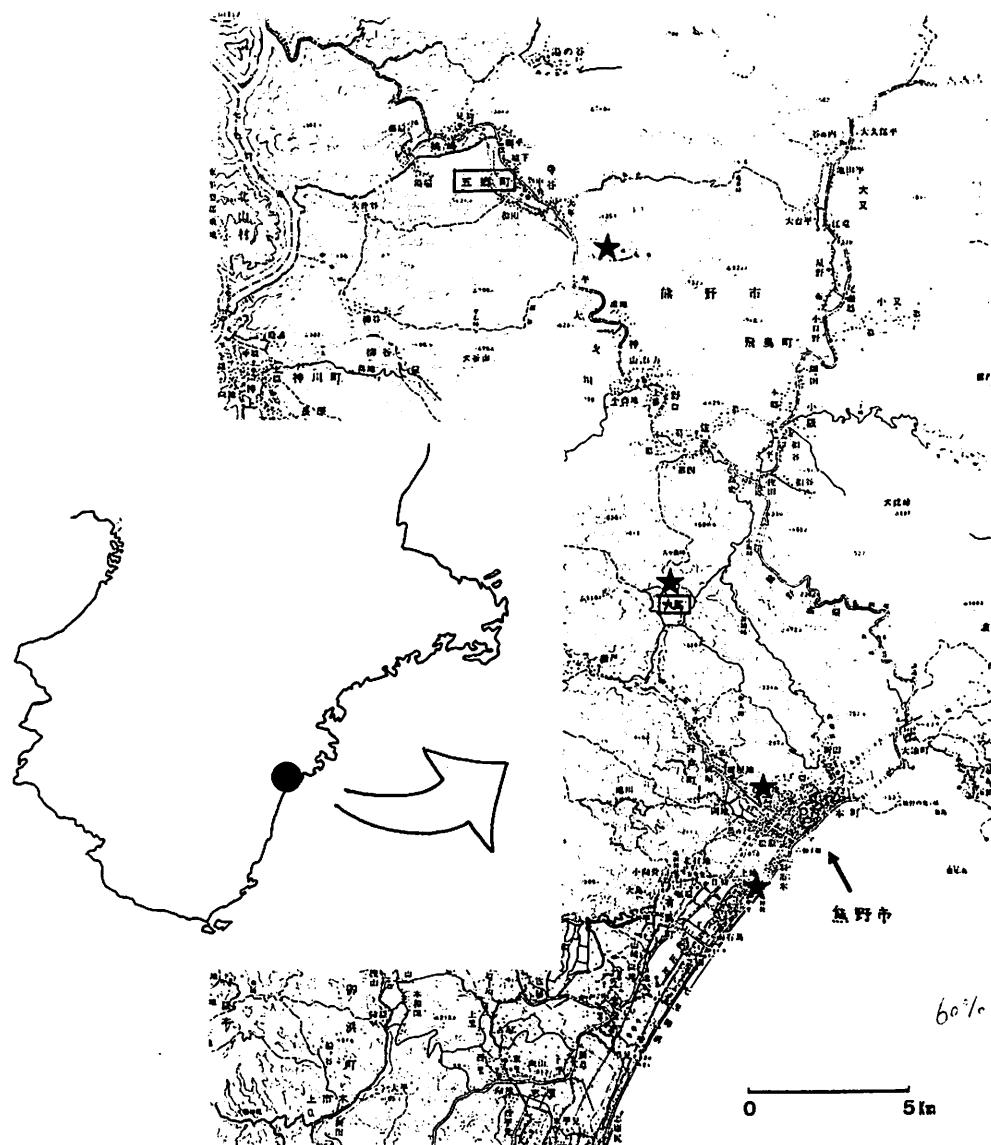


図.1 熊野合宿調査地概念図。星印は主な調査地点を示す。

<参加者>

相原宣孝C, 池田博明, 板倉泰弘, 稲垣成二, 井原庸, 大熊千代子, 太田定治M, 小澤実樹, 貝
発憲治, 笠原喜久雄, 加藤輝代子, 加藤倫之*, 加藤宏保*, 金野晋K, 木村知之, 熊田憲一, 貞
元己良, 塩崎哲哉, 新海明, 新海栄一, 須賀瑛文, 鈴木成生, 田副幸子, 田副啓子*, 谷川明男,
東条清, 中島晴子, 長井芳夫, 伴満, 平田昭K, 平松毅久, 細田みどり, 武藤茂忠M, 安田明雄,
吉田真, 米田宏(以上36名; *印は会員外, Cは中部, Mは三重, Kは関西の会員)

<目録>

この目録は主に池田博明, 貞元己良, 塩崎哲哉, 谷川明男, 安田明雄が採集同定したものに, 新
海明が記録したものを加えたものである。

記号の説明 M(雄成体), F(雌成体), m(雄幼体), f(雌幼体), y(性別不明幼体), e
(卵のう), 熊: 熊野市(簡保センター裏・花の窟他), 馬: 大馬神社, 五: 五郷(いさと)町.

Ctenizidae トタテグモ科

1. *Ummidia flagaria* (DÖRZ) キノボリトタテグモ 馬 F住居

Amaurobiidae ガケジグモ科

2. *Ixeuticus robustus* (L.KOCH) クロガケジグモ 熊 Fye

Uloboridae ウズグモ科

3. *Hyptiotes affinis* Bös. et STR. オウギグモ 馬 y

4. *Miagrammopes orientalis* Bös. et STR. マネキグモ 熊 F, 郷 y

5. *Uloborus sybotides* Bös. et STR. カタハリウズグモ 熊 F, 郷 F, 馬 F

6. *U. varians* Bös. et STR. ウズグモ 馬 F

Segestriidae エンマグモ科

7. *Ariadna lateralis* (KARSCH) ミヤグモ 熊 My

Pholcidae ユウレイグモ科

8. *Pholcus crypticolens* Bös. et STR. ユウレイグモ 馬 F

Theridiidae ヒメグモ科

9. *Achaeamea tepidariorum* (C.KOCH) オオヒメグモ 熊 Fme, 馬 FM

10. *A. culicivora* (Bös. et STR.) カグヤヒメグモ 熊 FM, 馬 F

11. *A. kompirensis* (Bös. et STR.) コンピラヒメグモ 馬 M, 郷 F

12. *A. japonica* (Bös. et STR.) ヒメグモ 熊 FMfy, 馬 y

13. *Theridion chikunii* YAGINUMA バラギヒメグモ 郷 f

14. <i>T. sterninotatum</i> Bös. et STR.	ムナボシヒメグモ	熊 FMe, 馬 F
15. <i>T. subpallens</i> Bös. et STR.	ハイイロヒメグモ	熊 M
16. <i>Enoplognatha transversifoveata</i> (Bös. et STR.)	カレハヒメグモ	熊 y, 馬 Fe
17. <i>Anelosimus crassipes</i> (Bös. et STR.)	アシブトヒメグモ	熊 Fy, 郷 Fy
18. <i>Dipoena castrata</i> Bös. et STR.	ボカシミジングモ	郷 F
19. <i>D. mustelina</i> (SIMON)	カニミジングモ	熊 F, 馬 M
20. <i>D. punctisparsa</i> YAGINUMA	シモフリミジングモ	郷 M
21. <i>D. japonica</i> (YOSIDA)	ヤマトミジングモ	熊 F
22. <i>Phoroncidia altiventris</i> YOSHIDA	ハラダカツクネグモ	
23. <i>Chrysso vesiculosa</i> (SIMON)	ヒシガタヒメグモ	熊 F
24. <i>C. rapulum</i> (YAGINUMA)	ギボシヒメグモ	郷 F
25. <i>Argyrodes fissifrons</i> O.P.-CAMBRIDGE	チリイソウロウグモ	熊 F
26. <i>A. fur</i> Bös. et STR.	フタオイソウロウグモ	熊 y
27. <i>A. cylindratus</i> (THORELL)	トビジロイソウロウグモ	熊 M, 郷 F
28. <i>A. saganus</i> (Dös. et STR.)	ヤリグモ	郷 Fy
29. <i>A. cylindrogaster</i> (SIMON)	オナガグモ	熊 y, 馬 y
30. <i>A. bonadea</i> (KARSCH)	シロカネイソウロウグモ	熊 M, 郷 F
31. <i>Spheropistha melanosoma</i> YAGINUMA	クロマルイソウロウグモ	熊 F, 馬 Fe

Theridiosomatidae カラカラグモ科

32. <i>Theridiosoma epeiroides</i> Bös. et STR.	カラカラグモ	馬 F
33. <i>Thridiosomatidae</i> gen. sp.	カラカラグモの一種	馬

Mimetidae センショウグモ科

34. <i>Ero japonica</i> Bös. et STR.	センショウグモ	熊 F
--------------------------------------	---------	-----

Linyphiidae サラグモ科

35. <i>Linyphia oidedicata</i> (HELDINGEN)	ヘリジロサラグモ	熊 M, 馬 Ff
36. <i>L. radiata</i> Walck WALCK	シロブチサラグモ	郷 y
37. <i>L. fuscata</i> (Oli)	クスミサラグモ	馬 y
38. <i>L. nigripectoris</i> (Oli)	ムネグロサラグモ	熊 FM, 馬 My
39. <i>Labulla contortipes</i> (KARSCH)	アショレグモ	馬 y
40. <i>Strandella yaginumai</i> H.SAITO	ヒメヨツボシサラグモ	馬 F
41. <i>Ummeliata tokyoensis</i> (UYEMURA)	トウキョウアカムネグモ	熊 F
42. <i>Erigonidium graminicola</i> (SUNDEVALL)	クロナンキングモ	熊 F
43. <i>Linyphiidae</i> gen. sp.	ヌカグモの一種	熊 FM

	Anapidae ヨリメグモ科	
44. <i>Conoculus lygadinus</i> KOMATSU	ヨリメグモ	馬 Fy
	Mysmenidae コツブグモ科	
45. <i>Mysmenella jobi</i> (KRAUS)	ナンブコツブグモ	馬 y
	Sympytognathidae ユアギグモ科	
46. <i>Sympytognathidae</i> gen. sp.	ユアギグモの一種	熊 F
	Urocteidae ヒラタグモ科	
47. <i>Uroctea compactilis</i> L.KOCH	ヒラタグモ	熊 y, 馬 y
	Araneidae コガネグモ科	
48. <i>Araneus ventricosus</i> L.KOCH	オニグモ	馬 F
49. <i>A. punctigera</i> (DOLESCHALL)	コゲチャオニグモ	熊 y, 馬 y, 郷 y
50. <i>A. pseudocentrodes</i> Bös. et STR.	トガリオニグモ	熊 F, 郷 FMy
51. <i>A. ejusmodi</i> Bös. et STR.	ヌサオニグモ	熊 FMy, 馬 F
52. <i>A. viridiventris</i> YAGINUMA	ハラビロミドリオニグモ	郷 F
53. <i>Araniella</i> sp.	ムツボシオニグモの一種	熊 y, 馬 y
54. <i>Neoscona scylla</i> (KARSCH)	ヤマシロオニグモ	熊 Ffy
55. <i>N. scylloides</i> (Bös. et STR.)	サツマノミダマシ	熊 Mf, 馬 my
56. <i>N. mellotteei</i> (SIMON)	ワキグロサツマノミダマシ	熊 fm, 馬 Ffy
57. <i>N. fuscocolorata</i> (Bös. et STR.)	ヤミイロオニグモ	熊 Fy
58. <i>N.</i> sp.	ヤミイロオニグモの一種	馬 F
59. <i>N. subpullata</i> (Bös. et STR.)	ヘリジロオニグモ	熊 FMy
60. <i>Yaginumia sia</i> (STRAND)	ズグロオニグモ	熊 y
61. <i>Cyrtarachne inaequalis</i> THORELL	オオトリノフンダマシ	馬 f
62. <i>C. bufo</i> (Bös. et STR.)	トリノフンダマシ	馬 y, 郷 y
63. <i>C. yunoharuensis</i> STRAND	アカイロトリノフンダマシ	郷 F
64. <i>C. nagasakiensis</i> STRAND	シロオビトリノフンダマシ	熊 F
65. <i>Ordgarius sexpinosus</i> (THORELL)	ムツトゲイセキグモ	馬 f
66. <i>Argiope amoena</i> L.KOCH	コガネグモ	熊 Fy, 馬 FM
67. <i>A. minula</i> KARSCH	コガタコガネグモ	熊 my, 馬 My, 郷 y
68. <i>A. bruennichii</i> (SCOPOLI)	ナガコガネグモ	熊 y, 馬 y
69. <i>A. aetherea</i> Walckenaer WALCKENAER	ムシバミコガネグモ	熊 F
70. <i>Larinia argiopiformis</i> Bös. et STR.	コガネグモダマシ	馬 y
71. <i>Acusilas coccineus</i> SIMON	ハツリグモ	熊 F, 馬 f
72. <i>Cyrtophora moluccensis</i> (DOLESCHALL)	スズミグモ	馬 f

73. <i>C. exanthematica</i> (DOLESCHALL)	キヌアミグモ	熊 Ff, 馬 y
74. <i>Polrys illepidus</i> C.KOCH	ゲホウグモ	馬 F
75. <i>Cyclosa octotuberculata</i> KARSCH	ゴミグモ	熊 F, 馬 Fe
76. <i>C. argenteoalba</i> Bös. et STR.	ギンメツキゴミグモ	熊 FMy, 馬 y
77. <i>C. laticauda</i> Bös. et STR.	キジロゴミグモ	馬 F
78. <i>C. ginnaga</i> YAGINUMA	ギンナガゴミグモ	熊 Fy, 馬 F
79. <i>C. vallata</i> KEYSERLING	マルゴミグモ	熊 y
80. <i>C. insulana</i> (COSTA)	シマゴミグモ	熊 F
81. <i>Chorizopes nipponicus</i> YAGINUMA	ヤマトカナエグモ	郷 F
82. <i>Nephila clavata</i> L.KOCH	ジョロウグモ	熊 y, 馬 y
83. <i>Meta reticuloides</i> YAGINUMA	ヤマジドヨウグモ	馬 y
84. <i>Metleuauge kompirensis</i> (Bös. et STR.)	タニマノドヨウグモ	馬 F
85. <i>M. yunohamensis</i> (Bös. et STR.)	メガネドヨウグモ	馬 y

etragnathidae アシナガグモ科

86. <i>Leucauge magnifica</i> YAGINUMA	オオシロカネグモ	熊 My
87. <i>L. subblanda</i> Bös. et STR.	コシロカネグモ	馬 F
88. <i>L. blunda</i> (L.KOCH)	チュウガタシロカネグモ	熊 FMy, 馬 F
89. <i>L. subgemmea</i> Bös. et STR.	キララシロカネグモ	馬 F, 郷 F
90. <i>Tetragnatha praedonia</i> L.KOCH	アシナガグモ	熊 My
91. <i>T. maxillosa</i> THORELL	ヤサガタアシナガグモ	熊 m

Agelenidae タナグモ科

92. <i>Agelela limbata</i> THORELL	クサグモ	熊 FM, 馬 F
93. <i>A. opulenta</i> L.KOCH	コクサグモ	熊 y, 馬 y

Oxyopidae ササグモ科

94. <i>Oxyopes sertatus</i> L.KOCH	ササグモ	熊 Fy, 馬 Mf
------------------------------------	------	------------

Lycosidae コモリグモ科

95. <i>Pardosa astrigera</i> L.KOCH	ウツキコモリグモ	馬 FMfm
96. <i>Pirata meridionalis</i> TANAKA	ミナミコモリグモ	馬 M

Pisauridae キシダグモ科

97. <i>Dolomedes sulfureus</i> L.KOCH	イオウイロハシリグモ	熊 y
98. <i>D. saganus</i> Bös. et STR.	スジアカハシリグモ	熊 y, 郷 y

	Clubionidae	フクログモ科	
99. <i>Clubiona vigil</i> KARSCH		ムナアカフクログモ	熊 F
100. <i>Itatsina praticola</i> (Bös. et STR.)		イタチグモ	熊 y
101. <i>Clubiondae</i> gen. sp.		フクログモ科の一種	熊 F
	Heteropodidae	アシダカグモ科	
102. <i>Heteropoda venatoria</i> (LINNAEUS)		アシダカグモ	馬 y
103. <i>H. forcipata</i> (KARSCH)		コアシダカグモ	熊 y, 馬 F
	Thomisidae	カニグモ科	
104. <i>Xysticus saganus</i> Bös. et STR.		オオヤミイロカニグモ	馬 Mf
105. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (FABRICIUS)		ハナグモ	熊 y, 馬 F
106. <i>M. japonicus</i> (Bös. et STR.)		コハナグモ	熊 Fy, 馬 Fm
107. <i>Oxytate striatipes</i> L.Koch		ワカバグモ	熊 y, 郷 y, 馬 F
108. <i>Tmarus yaginumai</i> ONO		ヤギスマノセマルトラフカニグモ	熊 F
109. <i>Thomisus labefactus</i> KAARSCH		アズチグモ	熊 My, 馬 y
	Philodromidae	エビグモ科	
110. <i>Philodromus auricomus</i> L.KOCH		キンイロエビグモ	馬 y
111. <i>P. subaureolus</i> Bös. et STR.		アサヒエビグモ	熊 F, 馬 Fy
	Salticidae	ハエトリグモ科	
112. <i>Menemerus confusus</i> Bös. et STR.		シラヒゲハエトリ	熊 FM, 馬 M
113. <i>Hasarius adansoni</i> (AUDOUIN)		アダンソンハエトリ	熊 Ff
114. <i>Yaginumaella ususudi</i> (YAGINUMA)		ウススジハエトリ	熊 y
115. <i>Yaginumanis sexdentatus</i> (YAGINUMA)		ムツバハエトリ	熊 FM
116. <i>Evarcha albaria</i> (L.KOCH)		マミジロハエトリ	熊 FM
117. <i>E. sp. (A)</i>		マミジロハエトリの一種(A)	熊 F
118. <i>E. crassipes</i> (KARSCH)		アシブトハエトリ	熊 FM
119. <i>Plexippoides doenitzii</i> (KARSCH)		デニニツツハエトリ	熊 F, 馬 FMf
120. <i>Silerella vittata</i> (KARSCH)		アオオビハエトリ	熊 F, 馬 F
121. <i>Marpissa elongata</i> (KARSCH)		ヤハズハエトリ	熊 M
122. <i>Laufelia aenea</i> SIMON		エキスハエトリ	熊 FMf
123. <i>Plexippus paykulli</i> (AUDOUIN)		チャスジハエトリ	熊 m
124. <i>P. setipes</i> Karsch KARSCH		ミスジハエトリ	熊 F
125. <i>Carrihotus xanthogramma</i> (LATREILLE)		ネコハエトリ	熊 F, 馬 F
126. <i>Harmochirus brachiatus</i> (THORELL)		ウデブトハエトリ	熊 M

127. <i>Jotus difficilis</i> (BöS. et STR.)	マガネアサヒハエトリ	熊 y
128. <i>Synagelides agoriformis</i> STRAND	アメイロハエトリ	熊 F
129. <i>Myrmachne japonica</i> (KARSCH)	アリグモ	熊 F
130. <i>Salticidae</i> gen. sp.	ハエトリグモ科の一種	馬 F

紀伊半島熊野市周辺の合宿では、以上のように 23科 130種類のクモ類が確認できた。三重県産のクモ類は1990年10月10日現在で 381種類が確認されている（三重クモ談話会、1990）。今回の合宿で採集されたクモのうちで注目すべき種類としてはヒシガタヒメグモやムツトゲイセキグモなどがあげられる。

本稿をまとめるにあたり、貝発憲治氏には目録の作成でお世話になった。ここに厚くお礼申し上げる。

また、この目録部分は合同合宿に参加した関西クモ研究会・中部蜘蛛懇談会・三重クモ談話会・和歌山クモの会との申し合わせにより各クモの会の会誌にも掲載予定である。

＜合宿点描＞（東京蜘蛛談話会通信 No.79 (1993.10.10.)より転載）

熊野合同合宿報告

台風の中の懲りない面々

かつて笹岡文雄さんが「雨の中の懲りない面々」と題した採集会の報告記事を書かれているが、久しぶりに同じことを演じた合宿だった。今年の夏は雨ばかりつづいたが、7月24日（土）も朝から雨が降ったりやんだりの生憎の天気で、ニュースは折しも台風4号の接近を伝えていた。

熊野路はやはり遠かった。名古屋で新幹線から紀勢本線に乗り継ぎ特急でなんと3時間余りかかるって目的地の熊野市駅に到着した。名古屋から同道した小澤さんと駅前の食堂で昼食をとり、明日の昼食になる熊野名物の「めはり寿司とサンマ寿司」の折り詰めを注文して民宿「ハタイ」へむかう。宿舎に着くとすでに貞元、池田、平松の各氏が到着していた。三氏は夜行直通バスで今朝早く現地入りして、すでに付近の山でムシバミコガネグモやユアギグモを探集していた。私はというと、相棒の高橋祐子さんが急に参加できなくなつたため、二日目の昼食の手配や部屋割り、視察地のトイレの確認など塙崎さんや金野さんに手伝つていただいて準備をした。この間にも天候はしだいに悪化しつつたつた。夕方近くになると参加者はほぼ揃い、一部の人たちは「天気が良い？うちに」と採集にでかけた。この時に熊田さんが早速ムツトゲイセキグモを発見採集して持ち帰り、参加者は興奮のおももちでクモが入つてゐるクダビンを覗き込んでいた。

今回の合同合宿では遠くは九州の大熊千代子さんをはじめ全国からのべ37名の申し込みがあり、民宿の食堂では一堂に会すことができず、2回にわけて順次食事にしてもらうほどであつた。夕食が終わるころになると断続的に風雨はさらに増してきた。テレビは台風が紀伊半島を直撃する旨を繰り返し伝えていた。恒例の夜間観察をどうしようかと担当者としては迷つたが、しかし私はいつも「迷つたらやってみよう」とう主義である。やらずに後悔するよりも、やって後悔するほう

がまだマシである。「この風雨の中でやるの?」と吉田真さんなどからあきれられつつも、夜間採集を決行することにした。30余名を目的地まで運ぶ車が9台もあり、この車をつなげて走らせるだけでも一苦労である。幸い、観察地には駐車場があたので駐車には困らなかつた。そこに下り立ち懐中電灯をつけると、さっそく「キヌアミグモがいた」という声が聞こえた。実は私もキヌアミグモを今まで一度も見たことがないのだ。ヒメグモのようなシート状の網にこのクモが静止していた。シートにはメッシュが刻み込まれている。スズミグモの網よりはるかに小形であるがその作りは紛れもなくスズミグモ属のものであった。ここでは2個体が発見されたが見物人が多くてとてもゆっくりと観察ができるような状態ではなかつた。平松さんや金野さんはここでもユアギグモを発見したので、参加者にこれを見てもらうことにした。水平の円網に無数のタテ糸が走る特徴のある網の中心にクモがとまっていた。クモは小さくて発見が困難だがその網は一度見たら絶対忘れないものだろう。今後、地元に帰った参加者からの発見の続報が届くことを期待しようと思う。

夜間観察地は熊野市駅の裏の丘にある簡易保険センターの宿泊所の裏手にあたり、付近にはミカンの畑が広がつていた。夕方に採集したムツトゲもここにいたのである。参加者一同ここが絶好の調査地であるとの印象は一致したのだが、近づく台風の唸りはいや増すばかりであつた。初めのうちはさして気にならなかつた雨もしだいに激しさを増していく。「ゴオーッ」とうなつて接近してきたのは風かと思っていたら、ものすごい勢いで降ってきた雨の音であつた。こうなると、あとはただ傘をさしてじつとするのみである。動けば濡れるから、ただ雨が小止みになるのをひたすら待つだけである。そんなことを何回か繰り返したが、さすがにもういけないというひどい降りになつてきた。それでも1時間ほど経過しただろか熱心な観察や採集はまだ道沿いやミカン畠のなかで繰り広げられていたが、これまでということになり「台風の中の懲りない面々」はやつと帰路についたのであつた。

宿舎に着くと皆ずぶ濡れではあつたが、なんとはなしに満足感を漂わせたような表情に見えたのは、幹事たる私の自惚れゆえの錯覚であろうか。

引用文献

貝発憲治,1990.三重クモ談話会採集会報告(平成2年夏の採集会).しのびぐも,(18):42-48.

貝発憲治,1991.三重クモ談話会採集会報告(平成3年夏の採集会).しのびぐも,(19):7-12.

三重クモ談話会編,1990.三重県産真正蜘蛛類目録(Ⅳ).しのびぐも,(18):49.

KISHIDAIA 投稿規定

1. 投稿資格は本会会員とする。ただし共著者には、会員以外の者を含むことが出来る。原稿依頼については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 投稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会に関する論文、解説、記録、紀行文、感想などとする。
3. 原稿の採否については、運営委員会にて決定する。また、原稿に対して加筆・削除・修正などお願いがある。
4. 貢数は図表を含めて、刷り上がり8頁以内とし、超過貢分は著者負担額となる。（現状、一頁につき2,500円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある。）
5. 特別な費用を要する印刷は、その実費を著者負担とする。
6. 別刷は原稿の一貢目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。（別刷の金額は、全額著者負担とする。）

原稿作成上の注意

1. 原稿用紙は、市販の400字詰横書原稿用紙を使用してください。ワープロの場合はA4サイズに40~44字×36行を目安にしてください。
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いてください。（学名の場合、属名と種名、それぞれに分けて赤線を引いてください。）
3. 写真は白黒にしてください。図は製図用インクなどにて、墨入れしてください。
4. 文章は5行目から書きはじめ、1行目にタイトルを3行目に著者名を書き入れてください。
5. 編集作業簡略化のため、パソコン、ワープロの原稿は、なるべくフロッピーでお送りください
もすようお願いいたします。

(1994年10月31日改正)

お知らせ

会員の皆様はすでにご存じのことだと思いますが、去る1995年4月5日、八木沼健夫先生が亡くなられました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたしますとともに、東京蜘蛛談話会として、次号 KISHIDAIA No. 70において、特集ページを設けて追悼いたしたいと思います。

つきましては、掲載する文章を募集いたしますので、八木沼先生に関する思い出などございましたら、編集担当までお寄せくださいますようお願い申しあげます。

なお、次号の発行は1996年1月を目指といたします。

編集後記

諸般の事情により当初予定より遅れてしまいましたが、無事No.69を発行することができました。これも皆様からの数多い投稿のおかげです。

今号からはフロッピーによる投稿も多くなり、編集作業もだいぶ楽になりました。しかしその分、投稿の数自体が増加しつつあるようで、うれしい悲鳴をあげています。うかうかしているとあつという間に1号分のスペースが埋まってしまいます。

と、いう訳で投稿される方は急ぎましょう。次号も通常通りの記事を積極的に掲載していきます。最近、力作が多い傾向がありますが、形式にこだわらず結構です。ちょっとした観察があれば、ぜひDRAGLINESにお寄せください。

1994年・1995年度運営委員会

池田 博明・稲葉 茂代・小野 展嗣・木村 知之・久保田 克哉・笹岡 文雄・高橋 登
高橋 祐子・谷川 明男・萩本 房枝・平松 毅久・安田 明雄

代 表：萱嶋 泉 191 東京都日野市多摩平7-15-9

本 部：小野 展嗣 169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部

会誌編集：木村 知之 215 神奈川県川崎市麻生区東百合ヶ丘4-38-12

通信編集：笹岡 文雄 170 東京都豊島区北大塚3-12-21

事務局（会計）：平松 毅久 350 埼玉県川越市上戸91-3 濑尾荘202

郵便振替：00170-8-74885 東京蜘蛛談話会（年会費 一般2,800円 学生2,000円）

会計監査：笠原 喜久男・鈴木 成生

KISHIDAIA No.69 1995年8月31日印刷 編集者 木村 知之

1995年8月31日発行 発行者 萩嶋 泉

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣方

印刷 株式会社 アトム

〒229 神奈川県相模原市千代田7-7-4

KISHIDATA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.69 Aug. 1995

目次

池田千洋・ヤイン回オニグモの生態	1
加藤せつみ・銅管下におけるヤリグモの発育	7
宮下和啓・銅管条件下でのアサヒエビグモ幼体の発育経過	15
徳本 洋・モリヤ奇ガエルによるクモ捕食	19
新海 明・千葉県沿岸山におけるシヨロクダモの個体数密度の年変化	23
畠守有紀・樹上に住居を作るキシメツウエトタテグモについての新知見	29
DRAGLINES	
宮下 重一・クサグモの網上の網を横取りするアリ	37
工藤義恵・マツモトオホバカニグモと卵のウ	37
小野辰嗣・ツユクモのオスの腹部の大きさはだんだん赤くなる	38
新海 明・コカタヤマシヨダモの卵のう保持姿勢	38
谷川晴男・小網代でチュウガタシロカネグモを採集	39
谷川晴男・北海道にもシノビグモがいる	39
畠守有紀・金沢市兼六園における地中性のクモ類の分布	39
赤羽尚夫・スジントハシリグモの魚の捕食行動を撮影	40
赤羽尚夫・神奈川県厚木市でムツトガイセキグモの生息を確認	41
1992年度合宿報告	
新海 明・高橋裕子・伊豆半島松崎町異見のクモ	48
1993年度(合同)合宿報告	
新海 明・紀伊半島熊野市周辺のクモ	53
KISHIDATA投稿規定 原稿作成上の注意	
編集後記	64